

<5歳クラス IX・X期 5月 > 「戸惑いを安心へ」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症予防に係る臨時休園のため今年度の幼稚園生活は1か月遅れで始まった。感染症予防の観点から、基本的に遊びの時間は園庭で、生活の場面は保育室でと、限定しての再開である。登園が再開されると気の合う友達との再会を喜ぶ姿が見られた。一方、どこで何をして遊んだらいいのか戸惑う幼児も数名いた。これまでは保育室、遊戯室、園庭と遊びたい場所で自由に遊ぶことができた。年長児になった不安や戸惑いに加え、コロナ禍で外遊び中心の生活になり、これまでとのギャップを感じているようであった。振り返りタイムでは、新しい環境に慣れて安心感をもって過ごせるように、担任も副担任も幼児と花を摘んだり虫を探したりするなどして一緒に遊ぶようにした。また「外、つまらない」という戸惑いから発せられた幼児のつぶやきから、外でも楽しいと感じられるような環境構成や援助について担任と副担任とで話し合い模索していた。このような中、摘んできた花をすり鉢ですり潰し、色水をつくる幼児がいた。このように思い付いたことを試す姿を支えることで、外での遊びが広がっていくのではと考え、5歳クラス周辺の環境構成を見直すことにした。

A児をはじめ何人かの幼児は、新しい遊具で遊んだり教師と園庭を散策したりして過ごしていたが、これといってやりたい遊びが見付からない様子であった。前年度担任からA児は製作遊びを好み、保育室で遊ぶことが多かったと聞いた。その話から、室内遊びが好きな幼児にとって、広々した園庭は所在なく落ち着かないのではと感じた。保育室の製作テーブルのように、遊んだり集ったり会話したりできる居場所が園庭にもつくれないかと考えた。そこで色水遊びを5歳クラス児が始めた機会に、花壇付近の環境を見直した。丸太椅子やテーブルは和やかさが出るようにテーブルクロスを敷き、プランターをその周りに配置することで、色水遊びコーナーのようになった。広い園庭でもプランターで囲まれていることで、落ち着いて過ごせるのではないかと考えた。

幼児が登園する前に、5歳保育室の先にある花壇の周りに丸太椅子やコンテナボックスを置き、テーブルクロスを敷いておく。側にすり鉢やすりこぎが入ったワゴンを置く。その一角をゆるやかに囲むように、パンジーが咲くプランターを配置しておいた。

5月21日

A児が、自ら集めたカラスノエンドウの種を持ってくる。種をさやから取り出し、すり鉢ですり潰す。

A児：「先生、見て」

教師：「Aちゃん、この種で色水つくったの？」

A児：「うん」

教師：「春色のスープみたい。やさしい色だねえ」

A児：「うん」

B児：「ぼくもやりたい」

B児の他にも5歳クラス児が仲間入りする。

B児：「どこでやろうかなあ」 辺りを見回す。

教師：「ビールケース使う？」

B児：「うん」

教師がビールケースとテーブルクロスを持ってくる。B児はそれらをテーブルに見立て、カラスノエンドウの色水をつくる。

この日、A児はカラスノエンドウの種を集めると自然な流れで色水をつくり始めた。教師は、A児が安心感をもって遊び続けられるように、A児に話しかけたり称賛の言葉をかけたりした。ワゴンの周りに興味をもった友達が集まってきた。やってみようとする意欲をまずは大切にしたいと考え、教師がビールケースやテーブルクロスを追加して一人一人がのびのびと試せるようにした。振り返りタイムでは、長い時間遊びを続け、集中していた様子を副担任と情報共有し、明日以降もワゴン等を用意し幼児が遊ぶ姿を見守っていくことにした。

5月22日

A児がプランターから紫色の花びらを集めて色水をつくっている。B児が教師のもとに来る。
B児：「ねえ先生、また昨日のやりたい」
教師：「いいねえ、Aちゃんもやっているよ」
B児：「敷くのはない？」
教師：「あるよ。テラスの棚に入っているよ」テラス横の棚にB児と行く。
教師：「ここにあるテーブルクロスは、どれでも外で使っていいよ」
B児：「わかった。これにしよう」教師と一緒にビールケースを運び、テーブルクロスを敷くと、側にあるプランターからパンジーの花を摘み、すり潰し始める。

B児は自分が色水遊びをするスペースをつくるために、教師へテーブルクロスを要望した。教師は、自分で遊びの場をつくらうとする姿を嬉しく思った。同時に、新型コロナウイルス感染症予防のため、今までは出していた廃材等が出ていないという環境の変化と、進級して保育室が変わったことから、幼児自身、自由に使ってよいものとそうでないものが分からないのではと察した。外で自由に使ってよい道具が分かることで遊びが広がっていくかもしれない。そこでB児に自由に使えるテーブルクロスの置き場所を伝え、一緒に遊びの場を整えた。自分のスペースがあることがB児の遊ぶ意欲や集中力を支えていると感じた。他の幼児にもタイミングを見て外で自由に使ってよいものを伝えていこうと振り返りタイムで共有した。

5月25日

A児は、テラス横の棚からテーブルクロスを取り出し、丸太椅子に敷いて座る。プランターから紫のパンジーの花を摘んですり潰す。
教師：「Aちゃん、今日も紫の色水つくっているんだね」
A児：「うん、今日はこっちの花でつくっているの」
教師：「紫でもいろいろな花があるんだね」
A児：「うん」
A児が遊んでいる横にC児が来る。
C児：「私、緑色をつくらう」花壇から葉っぱを摘み、すり潰す。
教師：「わあ、きれいな緑色になったね」
C児：「ペットボトルある？」
教師：「今は、ペットボトルはないけど、ちょっと待っててくれるかな」物置からプラスチックコップと半透明のキャップ付き容器（以下ソース容器）を持ってくる。
教師：「こんな入れ物があったんだけど、どう？」
C児：「こっちにする」ソース容器を手取る。
A児：「私も、それ欲しい」
教師：「はい、どうぞ」
A児とC児はつくった色水をソース容器に慎重に移し替え、じっと眺める。

週明け、登園の支度を終えるとA児は自らテーブルクロスを丸太椅子に敷いて、色水遊びを始めた。プランターで囲まれた空間が落ち着くのか、A児が集中して色水をつくっている姿に新しい生活に慣れてきたのではと感じた。しばらくしてC児が色水遊びに加わり、ペットボトルを要望してきた。感染症予防のため、ペットボトルの代わりに、購入したプラスチックコップを提供していた。しかし、プラスチックコップは、満タンにするために水を足すと色が薄まることや、持ち運びするときにこぼれて保管しにくいことがあった。そこでプラスチックコップよりも小さく、蓋がしっかり閉められる容器があることで、色水遊びが広がるのではないかと推測し、幼児の手のひらに収まるサイズ（縦4 cm、横3.5 cm、奥行き2 cm）のソース容器を用意した。色水を入れる容器を要望されたタイミングで新しい容器を提案しようと考えていた。また、幼児が自分で決めて使うことを大切にしたいと思い、プラスチックコップとソース容器の2種類を見せて、幼児が選べるようにした。新しい容器にC児もA児も興味を示した。A児C児が色水をソース容器に詰め、嬉しそう眺める姿から、翌日も遊びを続けるだろうと考え、翌日以降もソース容器が使えるように準備しておくことを副担任と確認した。

5月26日

A児：「先生、色水やりたい。昨日の入れ物に入れたい」

教師：「はい、どうぞ。今日は、どんな色ができるか楽しみね」

B児：「僕もやりたい。先生、Aちゃんと同じのください」

A児B児C児の他に4～5人の5歳クラス児が、色水をつくり、ソース容器に移し替える。

B児：「先生、同じのをちょうだい」

教師：「もう1ついるの？」

B児：「うん。今度は違う色をつくるんだ」何度もソース容器を

もらいに来て、つくった色水を並べてじっと見つめる。その中の1つにスズランテープをテープで付ける。

B児：「先生、これつくった」

教師：「わあ、いいねえ」

B児：「うん。これが一番きれいな色だったから、ひもを付けたんだ。」

A児が自分からソース容器をもらいに来て、前日の続きを始めた。ソース容器を提供し始めたことで色水遊びを楽しむ幼児がぐんと増えた。この容器は、すり鉢ですり潰した色水の量がちょうどよく入るサイズで、キャップをしめればこぼれない。そして、できた色水を並べられ、見比べやすいというよさがあった。持ち運びしやすい形状のため、友達同士で色を見比べる姿があった。自分や友達がつくったものを見て比べ、こんな色をつくりたい、もっと違う色水をつくりたいといった新たな意欲が生まれ、遊びの充実につながったと考える。

B児は、いろいろな色をつくることを楽しみ、お気に入りのひもを付けていた。ヘビイチゴの実を試したりハーブを入れて香りを楽しんだりする姿もあった。自分のしたいことを夢中になって試すようになったことを副担任と共有した。この日まで、ソース容器は教師ももらいに来ていたが、幼児らが存分に試行錯誤しながら没頭して遊ぶことができるように、翌日からはソース容器をワゴンに出しておき自由に使えるようにすることを確認した。

5月27日

ソース容器をかごに入れ、自由に使えるように出しておく。多くの幼児が花や実を摘み、色水をつくっている。

D児が、5歳保育室テラスのテーブルに置いてあった水性マジックを持って色水遊びのコーナーへ来る。すり鉢に水を入れ、ペン先を水に付ける。すると水の表面がマーブル模様になる。

D児：「見て」

教師：「わあ、どうしたの？」

D児：「あのね、水にペンを入れたら模様みたいになった」

教師：「へえ。すごいね」

D児：「あー、消えちゃった」ペンの色と水が混ざり、色水ができる。

D児：「もう1回やってみる」

E児：「私もやりたい。私、虹をつくる」水にペン先を浸し赤や黄色など次々に色水をつくる。

A児は、紫色のペンを手に取り、ペンを使って色水をつくる。

教師：「Aちゃん、今日はペンで紫の色水をつくったんだね」

A児：「うん」

教師：「この紫もきれいだね」

A児：「うん」ソース容器に移し替えると赤のペンで色水をつくる。

B児：「先生、プラスチックのコップください」

教師：「おっ、今度はコップに色水を入れるの」

B児：「ううん。色水がこぼれるから、コップを使うんだ」プラスチックコップをもらうと、底にソース容器を置き、ワゴンのかごから漏斗を持ってきて色水に移し替える。

水性マジックペンを使った色水遊びがD児のひらめきで偶然始まった。5歳保育室テラスにあるテーブルには、お絵描きをしたい幼児のために、白い紙と水性マジックペンが置いてあった。D児は、そこからペンを色水遊びコーナーへ持って行き、水の表面にペンを付け、マーブル模様をつくった。

ペンを色水遊びに使うことを教師は想定していなかったため、ペンの使用を受け入れるか、ペンは使わないことにするか迷った。近くに副担任が来たとき、経緯を話して相談した。これまで色水づくりをしていなかった幼児も夢中になってペンで色水をつくっている姿を見て、ペンを使うことを受け入れることにした。結果としてそれがよかった。ソース容器とペンが自由に使えるようになったことで、一気にワゴンやテーブルの周りが色水遊びをする幼児で賑わった。その中には、E児のように虹をつくるために7色の色水をつくってソース容器を並べたり、同じ水色でも濃淡の異なる色水をつくったりするなど、色合いにこだわって試す姿が見られた。これは自然物とは違った人工物のもつよさである。仲間の遊びからイメージが広がり、A児をはじめ多くの幼児がペンの色水づくりを試していた。B児は、自由に使ってよいソース容器の数が存分にあることや、プラスチックコップや漏斗など、遊びに使える道具が多種類あることで、ひらめいたり考えたりしたことを試していた。一人一人がやりたいことを見付け、イメージを広げながら遊びに没頭していることを実感した。

考察

年度初めのIX期は、年長クラスに進級した喜びや期待感だけでなく、新しい環境や年長児になったことによる不安や戸惑いから、やりたい遊びが見付からないことがある時期でもある。それに加え、コロナ禍による長期の休園、外遊び中心の新しい生活と、例年以上に環境の変化が大きいスタートであった。登園が再開し、友達との再会や新しい遊具を喜ぶ姿が見られた一方、久々の幼稚園生活や外遊び中心の新しい生活に戸惑う姿も見られた。毎日の振り返りタイムでは幼児一人一人がどのような様子だったか、遊びや生活、友達とのかかわりなどの様々な面から話し合い、まずは安心感を大切に保育をしていこうと確認してきた。放課後の職員室でも、情報交換を重ねてきた。そして安心感と同時に「外でも楽しい」と思えるように援助していくことが新しい生活の中で主体的に遊ぶ姿につながるのではと考えた。コロナ禍の新しい生活の中であっても、幼児一人一人が自分でしたいことを見付け、試行錯誤したり問題を解決したりして、自信を付けていくことを教師は願っている。今回は、安心して遊べる居場所としての役割ももった色水遊びの場を設けることと、幼児理解をもとに新しい材料や道具を出す援助を行った。徐々にやりたいことを見付けるようになり、主体的に遊ぶようになったと考える。そして、様々な色水を自分でつくったことで満足感や達成感を得ることができた。これらが幼児自ら遊びに向かう力を支えることにつながったと考える。

偶然始まったペンの使用も、遊びの広がりや大きなきっかけとなった。しかし、色水遊びに使用したペンは描画には適さなくなる。そこで水性マジックを2セット用意し色水用とお絵描き用に分けて使用することにした。人工的な色は混色がしやすい。遊びが続く中で、色水と色水を混ぜて違う色をつくったり、色水をジュースに見立てジュース屋さんごっこに発展したりした。ペンの色水は簡単につくれるため、興味をもった年下の幼児にやり方を教え、異年齢でのかかわりも増えた。年下の幼児を受け入れて一緒に遊ぶことは、よりよくかかわることにつながった。ペンを使った色水遊びを肯定的に受け入れてよかった。日々、幼児の言動や表情から幼児の内面を推し量り、今の幼児に大切にしたいことは何かを考え、副担任と語り合っている。幼児にとって大切にしたい願いを共有していることが、援助を考える際のベースとなり、幼児が主体的に遊びに向かう姿を支えることにつながったと考える。

<5歳クラス IX・X期 5月 > 「戸惑いを安心へ」

これまでの保育の様子

新型コロナウイルス感染症予防に係る臨時休園のため今年度の幼稚園生活は1か月遅れで始まった。感染症予防の観点から、基本的に遊びの時間は園庭で、生活の場面は保育室でと、限定しての再開である。登園が再開されると気の合う友達との再会を喜ぶ姿が見られた。一方、どこで何をして遊んだらいいのか戸惑う幼児も数名いた。これまでは保育室、遊戯室、園庭と遊びたい場所で自由に遊ぶことができた。年長児になった不安や戸惑いに加え、コロナ禍で外遊び中心の生活になり、これまでとのギャップを感じているようであった。振り返りタイムでは、新しい環境に慣れて安心感をもって過ごせるように、担任も副担任も幼児と花を摘んだり虫を探したりするなどして一緒に遊ぶようにした。また「外、つまらない」という戸惑いから発せられた幼児のつぶやきから、外でも楽しいと感じられるような環境構成や援助について担任と副担任とで話し合い模索していた。¹このような中、摘んできた花をすり鉢ですり潰し、色水をつくる幼児がいた。このように思い付いたことを試す姿を支えることで、外での遊びが広がっていくのではと考え、5歳クラス周辺の環境構成を見直すことにした。

A児をはじめ何人かの幼児は、新しい遊具で遊んだり教師と園庭を散策したりして過ごしていたが、これといってやりたい遊びが見付からない様子であった。前年度担任からA児は製作遊びを好み、保育室で遊ぶことが多かったと聞いた。その話から、室内遊びが好きな幼児にとって、広々した園庭は所在なく落ち着かないのではと感じた。保育室の製作テーブルのように、遊んだり集ったり会話したりできる居場所が園庭にもつけれないかと考えた。そこで色水遊びを5歳クラス児が始めた機会に、花壇付近の環境を見直した。²丸太椅子やテーブルは和やかさが出るようにテーブルクロスを敷き、プランターをその周りに配置することで、色水遊びコーナーのようになった。広い園庭でもプランターで囲まれていることで、落ち着いて過ごせるのではないかと考えた。

幼児が登園する前に、5歳保育室の先にある花壇の周りに丸太椅子やコンテナボックスを置き、テーブルクロスを敷いておく。側にすり鉢やすりこぎが入ったワゴンを置く。その一角をゆるやかに囲むように、バンジーが咲くプランターを配置しておいた。³

5月21日

A児が、自ら集めたカラスノエンドウの種を持ってくる。種をさやから取り出し、すり鉢ですり潰す。

A児：「先生、見て」

教師：「Aちゃん、この種で色水つくったの？」

A児：「うん」

教師：「春色のスープみたい。やさしい色だねえ」

A児：「うん」

B児：「ぼくもやりたい」

B児の他にも5歳クラス児が仲間入りする。

B児：「どこでやろうかなあ」 辺りを見回す。

教師：「ビールケース使う？」

B児：「うん」

教師がビールケースとテーブルクロスを持ってくる。B児はそれらをテーブルに見立て、カラスノエンドウの色水をつくる。

この日、A児はカラスノエンドウの種を集めると自然な流れで色水をつくり始めた。教師は、A児が安心感をもって遊び続けられるように、A児に話しかけたり称賛の言葉をかけたりした。ワゴンの周りに興味をもった友達が集まってきた。やってみようとする意欲をまずは大切にしたいと考え、教師が

¹ 幼児のつぶやきを拾い、援助につなげている (b) 保育者が焦って直接的な働きかけをするのではなく、環境を通して働きかけようとする (a) 幼児のつぶやきや様子 (実態) から援助の方法や環境を考えている (g)

² 幼児の様子から、環境を見直している (b) 5歳児が始めたことで年下の幼児に広がる (c)

³ その環境をどのように構成したらよいか、幼児の姿をもとにしながら試行錯誤し、改善に努めている。(a)

⁴ 幼児はこれまでの遊びの経験があるからこそ、種から色水遊びが始められている。それと同時に、色水遊びができる道具が準備されている (g) 教師に促されるのではなく幼児の主体的な遊びになっている (d)

コメントの追加 [h1]: 幼児のつぶやきや姿を捉え、そこから環境構成や援助を考えているという指摘が多かった。教師の思いを優先させたり、焦って直接的に遊びを誘導したりすることはしない。環境を通して働きかけることにより、幼児自身が興味や関心をもち、自らの思いで遊び出すことを願っている。

ビールケースやテーブルクロスを追加して一人一人がのびのびと試せるようにした。⁵振り返りタイムでは、長い時間遊びを続け、集中していた様子を副担任と情報共有し、明日以降もワゴン等を用意し幼児が遊ぶ姿を見守っていく⁶ことにした。

5月22日

A児がプランターから紫色の花びらを集めて色水をつくっている。B児が教師のもとに来る。
B児：「ねえ先生、また昨日のやりたい」
教師：「いいねえ、Aちゃんもやっているよ⁷」
B児：「敷くのはない？」
教師：「あるよ。テラスの棚に入っているよ」テラス横の棚にB児と行く。
教師：「ここにあるテーブルクロスは、どれでも外で使っているよ」
B児：「わかった。これにしよう」教師と一緒にビールケースを選び、テーブルクロスを敷くと、側にあるプランターからパンジーの花を摘み、すり潰し始める。

B児は自分が色水遊びをするスペースをつくるために、教師へテーブルクロスを要望した。教師は、自分で遊びの場をつくらうとする姿を嬉しく思った。同時に、新型コロナウイルス感染症予防のため、今までは出していた廃材等が出ていないという環境の変化と、進級して保育室が変わったことから、幼児自身、自由に使ってよいものとそうでないものが分からないのではと察した。外で自由に使ってよい道具が分かることで遊びが広がっていくかもしれない。そこでB児に自由に使えるテーブルクロスの置き場所を伝え、一緒に遊びの場を整えた。自分のスペースがあることがB児の遊ぶ意欲や集中力を支えていると感じた。他の幼児にもタイミングを見て外で自由に使ってよいものを伝えていこうと振り返りタイムで共有した。

5月25日

A児は、テラス横の棚からテーブルクロスを取り出し、丸太椅子に敷いて座る。プランターから紫のパンジーの花を摘んですり潰す。
教師：「Aちゃん、今日も紫の色水つくっているんだね」
A児：「うん、今日はこっちの花でつくっているの」
教師：「紫でもいろいろな花があるんだね」
A児：「うん」
A児が遊んでいる横にC児が来る。
C児：「私、緑色をつくらう」花壇から葉っぱを摘み、すり潰す。
教師：「わあ、きれいな緑色になったね」
C児：「ペットボトルある？」
教師：「今は、ペットボトルはないけど、ちょっと待っててくれるかな」物置からプラスチックコップと半透明でキャップ付き容器（以下ソース容器）を持ってくる。
教師：「こんな入れ物があったんだけど、どう？⁸」
C児：「こっちに作る」ソース容器を手取る。
A児：「私も、それ欲しい」
教師：「はい、どうぞ」
A児とC児はつくった色水をソース容器に慎重に移し替え、じっと眺める。

週明け、登園の支度を終えるとA児は自らテーブルクロスを丸太椅子に敷いて、色水遊びを始めた。プランターで囲まれた空間が落ち着くのか、A児が集中して色水をつくっている姿に新しい生活に慣れてきたのではと感じた。しばらくしてC児が色水遊びに加わり、ペットボトルを要望してきた。感染症予防等ため、ペットボトルの代わりに、購入したプラスチックコップを提供していた。しかし、プラ

コメントの追加 [h2]: 幼児が自由に使える道具や材料がある環境構成についての指摘が多かった。遊びへの思いが広がっていくように、教師は多様な材料を用意している。園庭にある草花もその一つである。これまでの経験がある5歳クラス児は、自由に使えるものについて多く知っている。しかし進級間もない時は、保育室やテラスで自由に使えるものが分からないことがあるため、タイミングを見て知らせている。自由に使えるものが分かり、したいことに合わせて材料や道具を選択できる環境は、幼児の主体性を育むことにつながると考える。

⁵ 幼児のすることを肯定的に捉え、いつでも対応できるようにしている。道具がすぐに出てくるところも、遊びの広がりを想定していたから(a) 幼児のやりたい気持ちを大切に、それが実現できるような環境を用意している (b)

⁶ まずは見守る、そこから援助が見えてくる。見守ることも援助 (c)

⁷ 自然に友達と遊びをつなげている (c)

⁸ 幼児が自由に使えるような環境設定 (d) 幼児が自身で選べる環境 (g) プランターで育てている花も遊びの材料として使える。(g)

⁹ 選択を求めるので、強制していない (c) 幼児自ら選ぶことで主体性を育む (d)

スチックコップは、満タンにするために水を足すと色が薄まることや、持ち運びするときにこぼれて保管しにくいことがあった。そこでプラスチックコップよりも小さく、蓋がしっかりと閉められる容器があることで、色水遊びが広がるのではないかと推測し、幼児の手のひらに収まるサイズ(縦4 cm、横3.5 cm、奥行き2 cm)のソース容器を用意した。色水を入れる容器を要望されたタイミングで新しい容器を提案しようと考えていた。¹⁰また、幼児が自分で決めて使うことを大切にしたいと思い、プラスチックコップとソース容器の2種類を見せて、幼児が選べるようにした。¹¹新しい容器にC児もA児も興味を示した。A児C児が色水をソース容器に詰め、嬉しそう眺める姿から、翌日も遊びを続けるだろうと考え、翌日以降もソース容器が使えるように準備しておくことを副担任と確認した。

コメントの追加 [h3]: 幼児自身が遊びに使う材料を選べるようにしていることへの指摘が多かった。教師は、幼児の姿から、遊びの展開を予測し材料を用意している。幼児に廃材や容器など材料の提供を要望されたとき、教師は幼児の要望に合う複数の材料を提示することをよく行っている。それは、自分で選ぶことにより幼児の主体性を育むことを願っているからである。また、選ぶという行為には必ず思考が伴う。材料を見比べ、自分のしたいことに適しているものを考える。「これがあればできそうだ」といった見通す経験を重ね、自分で考え遊びを進めていくことを願っている。

5月26日

A児：「先生、色水やりたい。昨日の入れ物に入れたい」
教師：「はい、どうぞ。今日は、どんな色ができるか楽しみね」
B児：「僕もやりたい。先生、Aちゃんと同じのください」
A児B児C児の他に4～5人の5歳クラス児が、色水をつくり、ソース容器に移し替える。
B児：「先生、同じのをちょうだい」
教師：「もう1ついるの?」¹²
B児：「うん。今度は違う色をつくるんだ」何度もソース容器をもらいに来て、つくった色水を並べてじっと見つめる。その中の1つにスズランテープをテープで付ける。
B児：「先生、これつくった」
教師：「わあ、いいねえ」
B児：「うん。これが一番きれいな色だったから、ひもを付けたんだ。」

A児が自分からソース容器をもらいに来て、前日の続きを始めた。ソース容器を提供し始めたことで色水遊びを楽しむ幼児がぐんと増えた。この容器は、すり鉢ですり潰した色水の量がちょうどよく入るサイズで、キャップをしめればこぼれない。そして、できた色水を並べられ、見比べやすいというよさがあった。持ち運びしやすい形状のため、友達同士で色を見比べる姿があった。自分や友達がつくったものを見て比べ、こんな色をつくりたい、もっと違う色水をつくりたいといった新たな意欲が生まれ、遊びの充実につながったと考える。

B児は、いろいろな色をつくることを楽しみ、お気に入りのひもを付けていた。ヘビイチゴの実を試したりハーブを入れて香りを楽しんだりする姿もあった。自分のしたいことを夢中になって試すようになったことを副担任と共有した。この日まで、ソース容器は教師にもらいに来ていたが、幼児らが存分に試行錯誤しながら没頭して遊ぶことができるように、翌日からはソース容器をワゴンに出しておき自由に使えるようにする¹³ことを確認した。

コメントの追加 [h4]: 材料を自由に使える環境構成への指摘と幼児の姿から材料の出し方を変えていることへの指摘があった。特に新しい材料が出始めたときは、材料への興味・関心が高まる。遊びの目的に合わせて材料を使うこともあれば、新しい材料を試してみたいという思いから使うこともある。遊びの広がりや幼児の姿を読み取りながら、材料の提供の仕方を副担任と相談している。ここでは遊びが広がってきたタイミングで材料を自由に使えるように材料の出し方を変更した。それは幼児が存分に試行錯誤し、思考が深まる姿を支えたいと考えたからである。

5月27日

ソース容器をかごに入れ、自由に使えるように出しておく。多くの幼児が花や実を摘み、色水をつくっている。
D児が、5歳保育室テラスのテーブルに置いてあった水性マジックを持って色水遊びのコーナーへ来る。すり鉢に水を入れ、ペン先を水に付ける。すると水の表面がマープル模様になる。
D児：「見て」
教師：「わあ、どうしたの?」
D児：「あのね、水にペンを入れたら模様みたいになった」
教師：「へえ。すごいね」¹⁴
D児：「あー、消えちゃった」ペンの色と水が混ざり、色水ができる。

¹⁰ いつでも提供できるように材を準備しているが、幼児がほしいと言うまで待っている(b) 幼児自身が必要感を持ち、幼児から要望されるまで出すのを待つ(g)

¹¹ 幼児自身が選択することでやりたい気持ちが増す(b) 2種類準備して、幼児自身に必要な材料を選ばせている(g) 選択し自己決定できる環境。何気ないけれど、幼児の主体性を大切にしている(a)

¹² 違いを確かめている問い(c)

¹³ 幼児の姿から材の出し方を変えている。幼児が使いたいときに使える(b) あらかじめ出しておく環境構成(C) 自由に使える環境(g)

¹⁴ ペンの使用用途が違うと注意するのではなく、発見と一緒に楽しむ保育者の言葉かけ(g)

D児：「もう1回やってみる」
 E児：「私もやりたい。私、虹をつくる」水にペン先を浸し、赤や黄色など次々に色水をつくる。
 A児は、紫色のペンを手に取り、ペンを使って色水をつくる。
 教師：「Aちゃん、今日はペンで紫の色水をつくったんだね¹⁵」
 A児：「うん」
 教師：「この紫もきれいだね」
 A児：「うん」ソース容器に移し替えると赤のペンで色水をつくる。
 B児：「先生、プラスチックのコップください」
 教師：「おっ、今度はコップに色水を入れるの」
 B児：「うん。色水がこぼれるから、コップを使うんだ」プラスチックコップをもらすと、底にソース容器を置き、ワゴンのかごから漏斗を持ってきて色水を移し替える。

水性マジックペンを使った色水遊びがD児のひらめきで偶然始まった。5歳保育室テラスにあるテーブルには、お絵描きをしたい幼児のために、白い紙と水性マジックペンが置いてあった。D児は、そこからペンを色水遊びコーナーへ持って行き、水の表面にペンを付け、マーブル模様をつくった。ペンを色水遊びに使うことを教師は想定していなかったため、ペンの使用を受け入れるか、ペンは使わないことにするか迷った。近くに副担任が来たとき、経緯を話して相談した。これまで色水づくりをしていなかった幼児も夢中になってペンで色水をつくっている姿を見て、ペンを使うことを受け入れることにした。¹⁶結果としてそれがよかった。ソース容器とペンが自由に使えるようになったことで、一気にワゴンやテーブルの周りが色水遊びをする幼児で賑わった。その中には、E児のように虹をつくるために7色の色水をつくってソース容器を並べたり、同じ水色でも濃淡の異なる色水をつくったりするなど、色合いにこだわって試す姿が見られた。これは自然物とは違った人工物のもつよさである。仲間の遊びからイメージが広がり、A児をはじめ多くの幼児がペンの色水づくりを試していた。B児は、自由に使ってよいソース容器の数が存分にあることや、プラスチックコップや漏斗など、遊びに使える道具が多種類あることで、ひらめいたり考えたりしたことを試していた。¹⁷一人一人がやりたいことを見付け、イメージを広げながら遊びに没頭していることを実感した。

考察

年度初めのIX期は、年長クラスに進級した喜びや期待感だけでなく、新しい環境や年長児になったことによる不安や戸惑いから、やりたい遊びが見付からないことがある時期でもある。それに加え、コロナ禍による長期の休園、外遊び中心の新しい生活と、例年以上に環境の変化が大きいスタートであった。登園が再開し、友達との再会や新しい遊具を喜ぶ姿が見られた一方、久々の幼稚園生活や外遊び中心の新しい生活に戸惑う姿も見られた。毎日の振り返りタイムでは幼児一人一人がどのような様子だったか、遊びや生活、友達とのかかわりなどの様々な面から話し合い、まずは安心感を大切に保育をしていこう¹⁸と確認してきた。放課後の職員室でも、情報交換を重ねてきた。そして安心感と同時に「外でも楽しい」と思えるように援助していくことが新しい生活の中で主体的に遊ぶ姿につながるのではと考えた。コロナ禍の新しい生活の中であっても、幼児一人一人が自分でしたいことを見付け、試行錯誤したり問題を解決したりして、自信を付けていくことを教師は願っている。¹⁹今回は、安心して遊べる居場所としての役割ももった色水遊びの場を設けることと、幼児理解をもとに新しい材料や道具を出す援助を行った。徐々にやりたいことを見付けるようになり、主体的に遊ぶようになったと考える。そして、様々な色水を自分でつくったことで満足感や達成感を得ることができた。これらが幼児自ら遊びに向かう力を支えることにつながったと考える。

偶然始まったペンの使用も、遊びの広がりの大きなきっかけとなった。しかし、色水遊びに使用し

¹⁵ 毎日A児に声をかけている。日々さまざまな幼児のしていることをしっかり見ている。同時に、A児に対して「いつも見ているよ」という肯定的なメッセージになっている (a)

¹⁶ 幼児のしていることを肯定的に捉えている。きっと何か意味があるのだろうと。そして、教師も迷う。迷いながらも、決定するときの根拠は幼児の姿。その判断はいいか悪いかではなく、幼児の育ちにとってどのような意味があるかで決まる (a) 幼児のやってみようとする気持ちを大切にしている (b) 幼児が夢中になる姿から援助に対する迷いの答えを出している (g)

¹⁷ こうした姿が見られることを普段から願っているからこそ、ペンを使うことを受け入れたのだろう (a)

¹⁸ まずはという表現。安心感が第一 (c)

¹⁹ 自分で遊びを見付けようとする姿を大切にし、そのためにできることをまずは環境の面から取り組んでいる (a) この思いが常に保育者は根底にもっており、副担任と共に共通認識されている (g)

コメントの追加 [h5]: 幼児の思いを大切にしているという指摘と教師も迷うが幼児の育ちや姿から判断しているという指摘があった。教師は、幼児が自ら遊びを見付け自発的に遊ぶことを大切にしている。だからこそ、ニュートラルな目線で幼児がしていることを読み取ることから援助を始める。その中で教師が迷うこともあるが、そこには幼児にとって何か意味があるのだろうと肯定的に捉えている。そして、教師の価値基準でいいか悪いかを判断することは避け、幼児が遊ぶ姿をよく見て、幼児の育ちにとってどのような意味があるかを考え、判断するようにしている。また、その判断が教師の独りよがりにならないようにするために、迷ったときは教師間で相談することを大切にしている。

たペンは描画には適さなくなる。そこで水性マジックを2セット用意し色水用とお絵描き用に分けて使用することにした。²⁰人工的な色は混色がしやすい。遊びが続く中で、色水と色水を混ぜて違う色をつくったり、色水をジュースに見立てジュース屋さんごっこに発展したりした。ペンの色水は簡単につくれるため、興味をもった年下の幼児にやり方を教え、異年齢でのかかわりも増えた。年下の幼児を受け入れて一緒に遊ぶことは、よりよくかかわることにつながった。ペンを使った色水遊びを肯定的に受け入れてよかった。日々、**幼児の言動や表情から幼児の内面を推し量り、今の幼児に大切にしたいことは何かを考え、副担任と語り合っている。**²¹幼児にとって大切にしたい願いを共有していることが、援助を考える際のベースとなり、幼児が主体的に遊びに向かう姿を支えることにつながったと考える。

²⁰ あえて2セット用意し、楽しかったから何でも使っていていいとはしていない。ルールというものも分かるようにしている (a)

²¹ 幼児の実態を把握し、必要な援助をその都度考えている (d) 副担任との共有する内容が考えていることである。やり方ではない (c)

<5歳クラス XI期 11~12月>「つくったものを活かして遊びが広がるように」

これまでの保育の様子

今年度、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、あそびの時間は基本的に屋外で過ごしてきた。冬が近付いた11月から、換気や消毒などの感染症対策をしながら、あそびの時間に保育室や遊戯室も使用することになった。日常的に保育室で製作ができる環境となり、つくりたいものを思い思いに製作する姿が増えていた。一方で、今年度は消毒のため、遊戯室に出した積木やダンボールなどは毎回片付けることになった。コロナ禍以前であれば、つくったものをそのまま遊戯室に残すことができ、翌日以降もその場所で遊びの続きができていたが、今年度はそれができず、つくって終わりという姿があった。例年と違う状況の中、つくったもので遊びを展開していく難しさを感じていた。

製作に集中できる環境になった分、まずはつくること自体に夢中になる幼児が多い中、友達とオムライスやピザなどの食べ物をつくり、おうちごっこやレストランごっこへと長く活かす姿もあった。大きさや形など本物らしさにこだわり工夫する姿や友達と協力しながら遊びを進める姿に育ちを感じていた。つくったものを活かして友達同士で遊びを展開するこのような姿が他の幼児や遊びの中で見られることを願っていた。

このような中、E児は11月上旬から紙コップや廃材などを使い、飛行機やバスなどの乗り物を毎日つくり続けていた。一つ一つの乗り物には、窓や細かい模様などがあり工夫が凝らされていた。E児があいさつ当番の日、帰りの集まりでこれまでつくった乗り物をみんなに紹介する機会があった。「車屋をやって、やまさんに売って」と紹介すると、興味をもったF児らから「それってショールームだね。ぼくもやりたい」と声が上がった。

11月17日

朝からE児F児は乗り物のショールームの準備をしている。G児F児も仲間入りするが、この日は天気がよく、年下の幼児のほとんどが屋外で遊んでいたこともあり、客は来ない。E児G児はおうちごっこを始め、F児は保育室に戻る。

F児：「僕も乗り物つくろうかな」本棚から乗り物図鑑を取り出す。

「トラックにしよう」棚から空き箱を取り出し、トラックをつくり始める。

I児：「僕もやる」空き箱にペットボトルのキャップを貼り付け、タイヤにする。

I児：「できた。先生見て！ここ開くんだよ」

教師：「わあ、後ろの扉が開いて荷物が載せられるんだね」

I児：「うん、そうなんだ」

教師：「このトラックは走るの」

I児：「うん、走るよ」床の上でトラックを押す。手を離すとトラックはすぐに止まる。

教師：「止まっちゃったね。どうしたら、もっと走るんだろうね」

I児：「ううん、そうだなあ」

H児：「ぼく知っているよ。あのね、長い爪楊枝が2本とストローが2本いるんだ。それでペットボトルのキャップに穴を開けて、爪楊枝を付けるんだ」

教師：「そうなの？長い爪楊枝とストローだったら部屋の物置にあるよ」

I児：「やってみよう」H児とともに保育室へ戻る。

H児は、ストローと竹串を使った車軸の作り方をI児の横でつくって見せる。I児は車軸の付いたタイヤをトラックに貼り付ける。そのトラックを手で押してみる。

I児：「やった！走った！」保育室を何度も走らせる。

F児：「ぼくのトラックも、走れるようにしたいな」

ここで片付けの時間となる。昼食後、F児E児は自分がつくった車のタイヤを取り外し、I児に教えてもらいながら、タイヤが回転するように車軸をつくる。午後の片付けの時間まで続ける。

教師：「ここに置けるよ」

前日に教師が5歳保育室の壁際に設置した飾り棚にI児E児F児は車を並べて置く。

保育室で、F児とI児が乗り物づくりを始めていた。E児が前日に紹介した乗り物のイメージに触発されたのだろう。F児I児は、自分も車をつくりたいという新たな思いが生まれていた。この思いを大切にしたいと考え、称賛し材を準備した。I児がつくったトラックは、E児がつくったものと同じように後ろの扉が開く造りになっていた。この時期、5歳クラスでは、輪ゴムロケットや雨どいのウオ

ータースライダーなどで輪ゴムの伸縮や水流の勢いなどの材の性質を活かした遊びをすることがあった。I児と車の走りについて話していると、H児がタイヤを回転させるためのしくみとそのため材料について教えてくれた。それは、昨年度の5歳クラス児がやっていた車のつくり方であった。教師が予想していない展開となり驚いたが、I児が興味をもった機会を逃さないように、すぐに材料を用意し製作ができる環境を整えた。また、もしかしたらショールームづくりが始まるかもしれないと想定し、用意しておいた棚を使用できることを伝えた。その日の振り返りタイムでは、I児が嬉しそうに何度も車を走らせていたこと、E児F児の他にも興味をもっている幼児がいたことを情報共有した。必要な材料を用意しておくことや、つくり方を知っているH児I児と他の幼児とのかかわりを意識していこうと話し合った。

11月18日

朝から製作テーブルでは、タイヤが動くしくみの車をつくる幼児でにぎわっている。

F児：「タイヤがうまく付かないなあ」

教師：「HくとIくんなら知っているかもしれないよ」

F児：「そうだね。聞いてみよう」保育室にいたI児に声をかけ、取り付け方を教わる。

J児は空き箱を重ねてタクシーの形をつくり、F児I児のやり方を見て、タイヤを取り付ける。タクシーが完成し、その様子を側で見ていたK児を誘いテラスへ向かう。

J児：「よし、外で走らせよう」

教師：「あら、外へ行くの？」

J児：「そうだよ。だって、車は外で走っているでしょ」

教師：「なるほどね。確かにそうだね」

K児：「でも、タイヤが汚れるなあ」

J児：「じゃあ、シートを持っていこう」ロッカーから自分のレジャーシートを取り出す。

J児K児はグラウンドの真ん中へ行くと、レジャーシートを広げる。

J児：「あれ、小さいなあ」車を走らせて、つぶやく。

教師は、棚にしまっていた4畳半サイズの緑色のレジャーシートを出して持っていく。

K児：「これ使いたい」緑色のシートをグラウンドに広げる。

J児：「ぼくのシートは、整備工場にしよう」緑色のシートの横に並べる。

K児：「このシートは草むらだな」緑色のシートの上でJ児のタクシーを借りて走らせる。

F児とI児も完成した乗り物を持って、仲間に加わる。しばらくの間、緑色のシートの上で乗り物を走らせている。そこに、園庭で捕まえたカエルを持ってL児が合流する。

L児：「ねえ見て。私、カエル捕まえたの」

K児：「これで自然が1パーセントになったな」カエルを見てつぶやく。

教師：「自然が増えたね」K児に声をかける。

K児：「まだ1パーセントしかない」

教師は、テラスに置いてあった落ち葉と木の端材を数個かごに入れ、そっとシートの横に置いておく。

K児：「あっ、これ使おう」かごに気付くと、落ち葉をシートの端に置き、端材で囲む。

K児：「これは畑。これで自然が10パーセントになった」

他の幼児も端材を使い始め、取り合いになる。

教師：「その木だったら、まだいっぱいあるよ」J児やF児と一緒にテラスに戻り、置き場所を伝える。

K児：「ここを公園にしよう」端材を並べる。

I児：「橋でつなごう」

緑色のシートの上に端材でつくった様々な建物が並び、I児はその周りを車を押して走らせる。

F児をはじめ、E児I児J児も新しく知ったしくみを活かして車をつくっている様子から、車づくりへの意欲の高まりを感じていた。教師は、材料を提供しながら、つくり方については幼児同士のかかわりの中で教え合えるように心がけた。J児が外で車を走らせようとしたとき、その思いを聞いてJ児がやりたいことを試せるように見守ることにした。遊びの流れを見守りつつ、さりげなく大判のシートを用意した。これまでの5歳クラス児の姿やカンファレンスから、ビールケースやシートなどで遊びのスペースが認識できる環境では、幼児同士のかかわりが増えたり遊びが広がったりすることが話題にな

っていた。この時も、グラウンドの中央に大きなシートを敷いたことが遊びを広げる支えとなった。また、自分の車を持たないK児が、緑色のシートを草むらに見立てていたことから、落ち葉や積木代わりになる木の端材を用意した。振り返りタイムでは、友達と話し合いながら、車を走らせる場づくりを試していたことを情報共有した。

一方で教師は、車が走るしくみになったことで車を走らせることに夢中になるのではと思っていた。遊びの広がり願ってシートを用意したが、木の端材を出したことは適切だったのか疑問に思った。K児の思いを読み取って出した端材であったが、車を走らせようとしたJ児の思いとは違う方向に遊びが進んだのかもしれない。振り返りタイムでは、同じスペースにいても、車を走らせること、遊び場をつくることといった遊びへの思いはそれぞれであった様子を共有し、翌日以降、幼児がそのとき何に夢中になっているのかを読み取り、その興味や思いに寄り添いながら援助を考えていこうと話し合った。

11月19日

J児K児F児L児らが保育室の製作テーブルで乗り物をつくっている。

J児：「ピザの配達車できた！ショールームしようかなあ。でも積木がないなあ」

教師：「使っている人に使いたいって言うていいのよ。言いに行く？」

J児：「うーん、どうしようかなあ。そうだ！洗車場をつくらう。先生ダンボールください」

教師：「ショールームじゃなくて、洗車場をつくるのね。どのくらいの大きさがいるの」

J児：「えーっと、切ればいいから、中くらいのください」

J児はダンボールを立体的に折り、その中に車が入るか確かめる。

K児：「できた」朝からつくっていた車を持って来る。

教師：「Kくん、ずっとがんばっていたね。何ができたの」

K児：「タクシーだよ」

教師：「すごいね。自分の車をつくったんだね」

K児は、洗車場をつくっているJ児のもとに行き仲間入りする。

K児：「Jくん、外に行こう」

J児：「いいよ」ダンボールでつくった洗車場を持って園庭に行く。

J児G児は自分の車をグラウンドの地面で走らせたり、洗車場に車を止めたりして遊ぶ。

この日も、朝から車づくりをする幼児が多くいた。K児はこの日、朝から黙々と車をつくっていた。前日は、自分の車はなく、車を走らせる場づくりをしていたが、自分の車をつくりたかったのだろう。K児が車を見せに来たとき、粘り強くつくったがんばりを称賛した。この日は、K児の呼びかけで、グラウンドで車を走らせることになった。シートを広げることはせず、J児がつくった洗車場を置き、地面で車を走らせたり洗車場に車を止めたりしていた。その姿からは自分がつくった車を動かす楽しさと同時に同じイメージで遊ぶ楽しさが感じられた。

昨年度、5歳クラス児は、車の速さにこだわって坂道コースをつくり、走らせて遊んでいた。今年度も車をつくっている様子に、前年度の5歳クラス担任から、遊びの発展に備えて、細長い板やベニヤ板を用意しておくことよいことを助言してもらった。多くの幼児が車をつくっている姿から今年も車を走らせることへ遊びが展開するのではと考え、板とベニヤ板の代わりになる大きなダンボールをすぐ出せるところに用意していた。しかし目の前の幼児は、車の走りより車を動かす楽しさに興味をもっている様子であった。同じ車づくりでも昨年度と今年度では遊び方が異なる。目の前の幼児が何に思いを寄せて遊んでいるのか様子をつかむことを援助を考える上で大切にしていこうとした。

11月20日

J児K児F児が昨日作った洗車場を囲んで遊んでいる。水に見立てた水色のビニールテープを貼ったり、洗車所の横にガソリンスタンドをつくったりしている。

K児：「ここでジャッキアップできるんだ。車が浮くんだよ」

教師：「なるほどね。すごいなあ」

J児K児L児は洗車場を囲んで、車を動かして遊んでいる。

E児：「あ、ハロウィンときのダンボールだ。これ使いたい」

教師：「どうぞ。Eちゃん、このダンボールを何に使うの」

E児：「えっとね。ダンボールに道をかくの。そうすれば車が走れるでしょ」

教師：「なるほど。楽しそうね。車を走らせるのだと、ここだと狭くないかな？」

E児：「遊戯室がいいかな。先生、手伝って」教師とダンボールを運ぶと道をたくさん描いていく。

J児：「あ、いいなあ。僕も入れて」

E児：「いいよ」

J児K児L児が加わり、一緒に道を描いたり、ダンボールに洗車場を合体させたりする。

K児：「こっちは、高速道路にしよう」

J児：「店とかもあつたらいいんじゃない」

E児：「そうだね」保育室の製作かごから切り紙のおうちを出し、ダンボールに貼る。

E児J児K児らが、ダンボールの上で車を動かしているところに、3歳クラス児が集まってくる。

3歳クラス児：「ぼくもやりたい」

E児：「いいよ。あつ！ちょっと待ってて」保育室でチケットをつくり、遊戯室に戻る。

E児：「みんな、聞いて！このチケットがあると、ここで車が走らせられます」

3歳クラス児：「チケットちょうだい」

E児：「はい、どうぞ。好きな車で走らせていいよ」

J児：「こっちは、洗車場だよ。こっちもいいよ」

J児K児F児は、保育室で洗車場を囲んで3人で遊んでいた。洗車場、ガソリンスタンド、ジャッキアップコーナーを回るように車を動かしている姿を見て、車からイメージしたものをつくり、そこで車を動かすことを楽しんでいると感じた。保育室にいたE児が、車を走らせる遊びに使うかもしれないと思い、壁際に置いてあつた大きなダンボールを見つけて、遊び始めた。大きなダンボールを広げ、道を描いている様子が車が動く町のイメージに見えたのだろう。J児たちもそこへ合流し、道を描いたり洗車場を合体させたりし、車を走らせる町のようなものをつくって遊びが進んだ。ダンボールを保育室から遊戯室に移動させたことは、多くの幼児の目に触れることになった。興味をもつた3歳クラス児のために、E児はチケットをつくり、J児たちも年下の幼児に声をかけていた。これまでより年下の幼児や他の友達とのやりとりが増え、かかわりの広がりを感じた。

その後、11月下旬から12月上旬にかけて、つくつた車に紐を付けてラジコンのように走らせたり、タクシーからパトカーに改造し警察ごっこをしたりしながら、車を使った遊びは続いていった。この間に、走る車のしくみを教えてもらいにきた4歳クラス児に、H児やJ児がタイヤが回るやり方をつくって見せながら教えることもあつた。車が遊びのアイテムとなり、イメージを膨らませながら遊ぶ姿を情報共有していった。

12月11日

5歳保育室に遊びに来た3歳クラス児が、飾り棚の上の車を見ている。

3歳クラス児：「車、貸してください」

F児J児：「これ使つていいよ」自分がつくつた車を渡す。

教師：「そうそう、前につくつた町もあるよ」ダンボールを遊戯室に広げ、3歳クラス児と一緒に車を動かして遊ぶ。

F児K児L児M児らが遊戯室に来る。J児は洗車場を横に並べる

L児：「こうしたらどうかな」ダンボールの端を持ち上げて車を置くと、車が下っていく。

L児：「車、滑るよ」

教師：「わー、面白いね」

教師はダンボールの端を持ち上げる手伝いをする。L児は、また車を滑らせる。

教師：「ここ、どうする？」ダンボールの端を持ち上げているところを見ながら言う。

L児：「あれがいいけど、使つているしなあ」ゲームボックスを見て言う。

ゲームボックスのほとんどを遊戯室でおうちごっこをしていた5歳クラス児が使つていた。

教師：「みんなでするものだから、使いたいって言つてみたらどうかな？」

L児：「そうする」

L児はおうちごっこをしている5歳クラス児のところへ交渉に行き、2つ分けてもらう。教師はその様子を見守る。L児は、ゲームボックスの上にダンボールの端を乗せるとテープで貼る。

ダンボールを貼つたところからL児や仲間入りしたF児K児らは自分の車を走らせる。下まで進むこともあれば、ダンボールがたわみ、途中で止まることもある。

教師：「ここで止まっちゃうね」ダンボールの中央を見て言う。

K児：「ここに積木を入れよう」

L児：「あ、それいいじゃん」

M児：「こっちもあった方がいいよ」

K児L児は、ダンボールの下に積木を入れてダンボールに傾斜がつくように調整する。

L児：「ここから落ちちゃうんだよな。ガードレールがいる。積木持ってきて」L児は、ダンボールの側面を立ち上げると、友達が持ってきた積木で支える。

教師：「おー、車が最後まで進むようになったねえ」

K児：「ここは、トンネルになったよ」ダンボールの下に置いた積木の間にもぐってM児やL児と車を走らせる。

L児がダンボールの端を持ち上げて、車を走らせることを試した際、L児が新しく試そうとしたことを実現できるように援助しようと考えた。L児がダンボールを置く台にしようとしたゲームボックスは、他の遊びに全部使われていた。L児にとってもゲームボックスのほとんどを使っていた友達にとっても、自分の気持ちを伝えたり相手の考えを聞いたりして共有物をどう使うか考える機会になると考え、L児が交渉する様子を側で見守った。L児は自分の思いを伝え、ゲームボックスを2つ分けてもらおうと、立体的な坂ができた。集まってきた友達や年下の幼児が次々に車を走らせる中で、ダンボールの形状から最後まで車が進まなくなった。どうしようかと試行錯誤したり協力したりする姿を大切にしたいと考え援助は控えめにした。

12月14日

L児：「またダンボールの遊び、やりたい」

教師：「この前、楽しかったよね」保育室に片付けておいたダンボールをL児と遊戯室に広げる。

K児M児が加わり、前回遊んだときのように、ゲームボックスや積木を並べ、ダンボールの坂をつくる。

4歳クラス児：「ぼくもやりたい」

L児：「いいよ」

K児は、坂の上に細いダンボールを渡すように貼り付ける。

L児：「Kくん、これ何？」

K児：「橋だよ」細いダンボールの上で車を動かすとダンボールがたわむ。

L児：「でも、壊れそうだよ」

K児：「これで大丈夫」細いダンボールの真下に積木を置き、柱のようにする。

L児：「いいね。こかもトンネルになるじゃん」

教師：「本当だ。下にも上にもトンネルがあつてすごいね」

L児：「ここからスタートさせたらいいんじゃない？」

K児：「よし、やろう」

K児L児は4歳クラス児と坂の上の橋やトンネルで何度も車を走らせる。

週末をはさんだ14日、11日につくった場にさらに新しいアイデアを出し合いながら、幼児同士でダンボールと積木などを使い車のコースをつくっていた。教師はそのアイデアを称賛する言葉をかけながら、その様子を見守った。振り返りタイムでは、これまでの遊びの経験から、車を動かす場が坂道の町のように発展し、協同して遊ぶ姿が見られたことを共有した。車を動かすことと車が走る場をつくることの両方を楽しむ姿から、自分たちがやりたい目的に合わせて、友達同士で遊びをつくり進めていく育ちを感じた。

考察

室内遊びが中心となった11月以降、製作に没頭する幼児の様子から、製作したものを活かして遊びを展開する援助について考えてきた。新型コロナウイルス感染症予防のため、例年とは違い、つくったものをその場に残すことはできないが、このような状況でも遊びが充実することによって様々な力が育まれていくことを願っていた。

製作遊びが保育室でできるようになると、E児の乗り物をはじめ、オムライスやピザなど、この頃の5歳クラス児がつくるものは見た目の本物らしさにこだわり工夫していることが多かった。またゴムの伸縮や水流などの性質を遊びに活かす姿もあった。そこで、乗り物づくりに性能としての本物らしさに気付けるような援助をすることで、新たな試行錯誤が生まれ継続した遊びになるのではと考え

た。タイヤが回転する車ができたとき、教師は昨年度の様子から、車のスピードに興味をもつようになるのではと予想していた。しかし、スピードより車が動いている町のような場をつくることを楽しむ様子を感じ、援助の方向性に悩んだ。その援助を考える拠り所になったのはカンファレンスで得た『幼児のしていることを肯定的に捉える』という共通認識である。幼児が何に興味があり何をしようとしているのか、その読み取りを大切にするという基本に立ち返ることができた。洗車場や道路をつくる姿に車がジオラマのような町で動くイメージで遊びを楽しんでいる姿を感じ、その遊びの中でかわりが広がり、仲間同士で試したり協力したりしていくことを願って援助を考えていくようになった。車の遊びが始まった頃は、同じ空間にいても、それぞれがしたいことをしていて双方向のやりとりは少なかった。遊びが展開するにつれて、その場にいた仲間で言葉を交わし、考えを出し合っって協同的に遊ぶ姿が見られるようになった。

遊びの中で、年下の幼児に快く車を貸したり、つくり方を教えたりする年上らしい姿も見られた。遊戯室を遊びの場としたり、保育室の飾り棚に乗り物を置いておけるようにしたりすることで、遊びにかかわる幼児だけでなく、多くの幼児の目に自然と触れることになった。これも遊びやかかわりの広がりにつながる一つの環境構成になったのではないかと考える。

車といっても、幼児が抱くイメージや興味は一人一人異なる。日々、幼児が遊ぶ様子を情報共有して幼児の思いを読み取ること、読み取った思いに添った援助を考えていくこと。その積み重ねが、つくったものを活かして遊びを広げることにつながることを実感した。

<5歳クラス Ⅱ期 11～12月>「つくったものを活かして遊びが広がるように」

これまでの保育の様子

今年度、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、あそびの時間は基本的に屋外で過ごしてきた。冬が近付いた11月から、換気や消毒などの感染症対策をしながら、あそびの時間に保育室や遊戯室も使用することになった。日常的に保育室で製作ができる環境となり、つくりたいものを思い思いに製作する姿が増えていた。一方で、今年度は消毒のため、遊戯室に出した積木やダンボールなどは毎回片付けることになった。コロナ禍以前であれば、つくったものをそのまま遊戯室に残すことができ、翌日以降もその場所で遊びの続きができていたが、今年度はそれができず、つくって終わりという姿があった。例年と違う状況の中、つくったもので遊びを展開していく難しさを感じていた。

製作に集中できる環境になった分、まずはつくること自体に夢中になる幼児が多い中、友達とオムライスやピザなどの食べ物をつくり、おうちごっこやレストランごっこへと長く活かす姿もあった。大きさや形など本物らしさにこだわり工夫する姿や友達と協力しながら遊びを進める姿に育ちを感じていた。つくったものを活かして友達同士で遊びを展開するこのような姿が他の幼児や遊びの中で見られることを願っていた。

このような中、E児は11月上旬から紙コップや廃材などを使い、飛行機やバスなどの乗り物を毎日つくり続けていた。一つ一つの乗り物には、窓や細かい模様などがあり工夫が凝らされていた。E児が**あいさつ当番の日、帰りの集まりでこれまでつくった乗り物をみんなに紹介する機会**があった。「車屋をやって、やまさんに売ると」と紹介すると、興味をもったF児らから「それってショールームだね。ぼくもやりたい」と声が上がった。

11月17日

朝からE児F児は乗り物のショールームの準備をしている。G児F児も仲間入りするが、この日は天気がよく、年下の幼児のほとんどが屋外で遊んでいたこともあり、客は来ない。E児G児はおうちごっこを始め、F児は保育室に戻る。

F児：「僕も乗り物つくろうかな」本棚から乗り物図鑑を取り出す²。

「トラックにしよう」棚から空き箱を取り出し、トラックをつくり始める。

I児：「僕もやる」空き箱にペットボトルのキャップを貼り付け、タイヤにする。

I児：「できた。先生見て！ここ開くんだよ」

教師：「わあ、後ろの扉が開いて荷物が載せられるんだね」

I児：「うん、そうなんだ」

教師：「このトラックは走るの」

I児：「うん、走るよ」床の上でトラックを押す。手を離すとトラックはすぐに止まる。

教師：「止まっちゃったね。どうしたら、**もっと走るんだらうね**³」

I児：「ううん、そうだなあ」

H児：「ぼく知っているよ。あのね、長い爪楊枝が2本とストローが2本いるんだ。それでペットボトルのキャップに穴を開けて、爪楊枝を付けるんだ⁴」

教師：「そうなの？長い爪楊枝とストローだったら部屋の物置にあるよ」

I児：「やってみたい」H児とともに保育室へ戻る。

H児は、ストローと竹串を使った車軸のつくり方をI児の横でつくって見せる。I児は車軸の付いたタイヤをトラックに貼り付ける。そのトラックを手で押してみる。

I児：「やった！走った！」保育室を何度も走らせる。

F児：「ぼくのトラックも、走れるようにしたいな」

ここで片付けの時間となる。昼食後、F児E児は自分がつくった車のタイヤを取り外し、I児に教えてもらいながら、タイヤが回転するように車軸をつくる。午後の片付けの時間まで続ける。

教師：「ここに置けるよ」

¹教師が絶えずもち続けた思いがあったからこそ機を捉えることができる (a) 遊びが他の幼児にも広がっていくきっかけになっている (b)

²遊びのイメージを広げるための環境 (b)

³幼児自身がどうしたら良いか考えられるような言葉がけ (b)

⁴昨年度、年上の幼児に教えてもらったことを覚えていてその経験を今度が自分が友達に教える姿 (b)

前日に教師が5歳保育室の壁際に設置した飾り棚にI児E児F児は車を並べて置く⁵。

保育室で、F児とI児が乗り物づくりを始めていた。E児が前日に紹介した乗り物のイメージに触発されたのだろう。F児I児は、自分も車をつくってみたいという新たな思いが生まれていた。この思いを大切にしたいと考え、称赞し材を準備した。I児がつくったトラックは、E児がつくったものと同じように後ろの扉が開く造りになっていた。この時期、5歳クラスでは、輪ゴムロケットや雨どいのウォータースライダーなどで輪ゴムの伸縮や水流の勢いなどの材の性質を活かした遊びをすることがあった。I児と車の走りについて話していると、H児がタイヤを回転させるためのしくみとそのため材料について教えてくれた。それは、昨年度の5歳クラス児がやっていた車のつくり方であった。教師が予想していない展開となり驚いたが、I児が興味をもった機会を逃さないように、すぐに材料を用意し製作ができる環境を整えた⁶。また、もしかしたらショールームづくりが始まるかもしれないと想定し、用意しておいた棚を使用できることを伝えた⁷。その日の振り返りタイムでは、I児が嬉しそうに何度も車を走らせていたこと、E児F児の他にも興味をもっている幼児がいたことを情報共有した。必要な材料を用意しておくことや、つくり方を知っているH児I児と他の幼児とのかかわりを意識⁸していることと話し合った。

11月18日

朝から製作テーブルでは、タイヤが動くしくみの車をつくる幼児でにぎわっている。
F児：「タイヤがうまく付かないなあ」
教師：「HくんとIくんなら知っているかもしれないよ⁹」
F児：「そうだね。聞いてみよう」保育室にいたI児に声をかけ、取り付け方を教わる。
J児は空き箱を重ねてタクシーの形をつくり、F児I児のやり方を見て、タイヤを取り付ける。タクシーが完成し、その様子を側で見ていたK児を誘いテラスへ向かう。
J児：「よし、外で走らせよう」
教師：「あら、外へ行くの？」
J児：「そうだよ。だって、車は外で走っているでしょ」
教師：「なるほどね。確かにそうだね」
K児：「でも、タイヤが汚れるなあ」
J児：「じゃあ、シートを持っていこう」ロッカーから自分のレジャーシートを取り出す¹⁰。
J児K児はグラウンドの真ん中へ行くと、レジャーシートを広げる。
J児：「あれ、小さいなあ」車を走らせて、つぶやく。
教師は、棚にしまっていた4畳半サイズの緑色のレジャーシートを出して持っていく¹¹。
K児：「これ使いたい」緑色のシートをグラウンドに広げる。
J児：「ぼくのシートは、整備工場にしよう」緑色のシートの横に並べる。
K児：「このシートは草むらだな」緑色のシートの上でJ児のタクシーを借りて走らせる。
F児とI児も完成した乗り物を持って、仲間に加わる。しばらくの間、緑色のシートの上で乗り物を走らせている。そこに、園庭で捕まえたカエルを持ってL児が合流する。
L児：「ねえ見て。私、カエル捕まえたの」
K児：「これで自然が1パーセントになったな」カエルを見てつぶやく。
教師：「自然が増えたね」K児に声をかける。
K児：「まだ1パーセントしかない」
教師は、テラスに置いてあった落ち葉と木の端材を数個かごに入れ、そっとシートの横に置いて

⁵「ショールーム」という魅力的なワードを取り上げ、すぐに飾り棚を用意したことで、遊びが展開していくのが難しい中ではあったが、“場”ができ遊びが盛り上がったのだと感じる（f）

⁶タイミングを逃さず援助することで幼児の興味関心を支える（a）幼児の姿に応じて、すぐに環境を整えている→思いを実現できる（b）

⁷幼児の姿から予想し、予め環境を用意している。使うかどうかを幼児自身が決めることができる（b）

⁸つくり方を知っている幼児をつなげる（c）

⁹幼児同士のつながりや教え合う姿のきっかけになる（b）教師が教えるのではなく友達同士のかかわりを大切にしている（g）

¹⁰すぐに取り出して自由に遊びに使うことができる環境（b）

¹¹幼児のつぶやきを拾い援助している（b）

おく¹²。

K児：「あっ、これ使おう」かごに気付くと、落ち葉をシートの端に置き、端材で囲む。

K児：「これは畑。これで自然が10パーセントになった」

他の幼児も端材を使い始め、取り合いになる。

教師：「その木だったら、まだいっぱいあるよ」J児やF児と一緒にテラスに戻り、置き場所を伝える。

K児：「ここを公園にしよう」端材を並べる。

I児：「橋でつながろう」

緑色のシートの上に端材でつくった様々な建物が並び、I児はその周りを車を押して走らせる。

F児をはじめ、E児I児J児も新しく知ったしくみを活かして車をつくっている様子から、車づくりへの意欲の高まりを感じていた。教師は、材料を提供しながら、**つくり方については幼児同士のかかわりの中で教え合えるように心がけた¹³**。J児が外で車を走らせようとしたとき、その思いを聞いてJ児がやりたいことを試せるように見守ることにした¹⁴。遊びの流れを見守りつつ、さりげなく大判のシートを用意した。これまでの5歳クラス児の姿やカンファレンスから、ビールケースやシートなどで遊びのスペースが認識できる環境では、幼児同士のかかわりが増えたり遊びが広がったりすることが話題になっていた。この時も、グラウンドの中央に大きなシートを敷いたことが遊びを広げる支えとなった。また、自分の車を持たないK児が、緑色のシートを草むらに見立てていたことから、落ち葉や積木代わりになる木の端材を用意した。振り返りタイムでは、友達と話し合いながら、車を走らせる場づくりを試していたことを情報共有した。

一方で教師は、車が走るしくみになったことで車を走らせることに夢中になるのではと思っていた。**遊びの広がりを願ってシートを用意したが、木の端材を出したことは適切だったのか疑問に思った。**K児の思いを読み取って出した端材であったが、車を走らせようとしたJ児の思いとは違う方向に遊びが進んだのかもしれない。振り返りタイムでは、同じスペースにいても、車を走らせること、遊び場をつくることといった遊びへの思いはそれぞれであった様子を共有し、翌日以降、幼児がそのとき何に夢中になっているのかを読み取り、その興味や思いに寄り添いながら援助を考えていこうと話合った¹⁵。

コメントの追加 [h1]: 幼児同士のつながりや、自分たちの力でできた達成感を大切にしているという指摘があった。つくり方を知っていたH児がI児に教えたように、教師は幼児同士のかかわりの中で、やりたいことを実現したり遊びが広がったりすることを願っている。幼児同士のつながりを援助することで、ことばの力やよりよくなかかわる力などの育ちを支えたいと考えているからである。そのため、教師は幼児同士のかかわりへつながるような援助を日頃から意識している。

11月19日

J児K児F児L児らが保育室の製作テーブルで乗り物をつくっている。

J児：「ピザの配達車できた！ショールームしようかなあ。でも積木がないなあ」

教師：「使っている人に使いたいって言うていいのよ。言いに行く？」

J児：「うーん、どうしようかなあ。そうだ！洗車場をつくらう。先生ダンボールください」

教師：「ショールームじゃなくて、洗車場をつくるのね。どのくらいの大きさがいるの？」

J児：「えーっと、切ればいいから、中くらいのください」

J児はダンボールを立体的に折り、その中に車が入るか確かめる。

K児：「できた」朝からつくっていた車を持って来る。

教師：「Kくん、ずっとがんばっていたね。何ができたの？」

K児：「タクシーだよ」

教師：「すごいね。自分の車をつくったんだね」

K児は、洗車場をつくっているJ児のもとに行き仲間入りする。

K児：「Jくん、外に行こう」

J児：「いいよ」ダンボールでつくった洗車場を持って園庭に行く。

J児G児は自分の車をグラウンドの地面で走らせたり、洗車場に車を止めたりして遊ぶ。

この日も、朝から車づくりをする幼児が多くいた。K児はこの日、朝から黙々と車をつくっていた。

¹²幼児の言葉を聞き取り受け止め、理解している（援助している）（g）

¹³つなぐ援助により幼児同士のかかわりから学べるようにしている（a）幼児同士のつながり、かかわりを大切にしている。「自分たちでできた」満足感、達成感（b）つくり方を知っている幼児をつなげる（c）教師がつくり方を教えるのではなく幼児が伝えることで他児に伝える力や一緒につくり上げる楽しさも育つと感じた（f）幼児同士のかかわりを大切にしている（g）

¹⁴J児自身のやりたい気持ちを優先している（g）

¹⁵よかれと思ってやったことも振り返りタイムでその妥当性を確認することが欠かせない。そこからまた援助の方針を考え直すことができる（a）援助について振り返り、次につなげている（特に「うーん」と思ったことを）（b）

前日は、自分の車はなく、車を走らせる場づくりをしていたが、自分の車をつくりたかったのだろう。K児が車を見せに来たとき、粘り強くつくったがんばりを称賛した¹⁶。この日は、K児の呼びかけで、グラウンドで車を走らせることになった。シートを広げることはせず、J児がつくった洗車場を置き、地面で車を走らせたり洗車場に車を止めたりしていた。その姿からは自分がつくった車を動かす嬉しさと同時に同じイメージで遊ぶ楽しさを感じられた。

昨年度、5歳クラス児は、車の速さにこだわって坂道コースをつくり、走らせて遊んでいた。今年度も車をつくっている様子に、前年度の5歳クラス担任から、遊びの発展に備えて、細長い板やベニヤ板を用意しておくことよいことを助言してもらった¹⁷。多くの幼児が車をつくっている姿から今年も車を走らせることへ遊びが展開するのではと考え、板とベニヤ板の代わりに大きなダンボールをすぐ出せる場所に用意していた。しかし目の前の幼児は¹⁸、車の走りより車を動かす楽しさに興味をもっている様子であった。同じ車づくりでも昨年度と今年度では遊び方が異なる。目の前の幼児が何に思いを寄せて遊んでいるのか様子をつかむことを援助を考える上で大切にしていこうとした¹⁹。

11月20日

J児K児F児が昨日作った洗車場を囲んで遊んでいる。水に見立てた水色のビニールテープを貼ったり、洗車所の横にガソリンスタンドをつくったりしている。
K児：「ここでジャッキアップできるんだ。車が浮くんだよ」
教師：「なるほどね。すごいなあ」
J児K児L児は洗車場を囲んで、車を動かして遊んでいる。
E児：「あ、ハロウィンのときのダンボールだ。これ使いたい」
教師：「どうぞ。Eちゃん、このダンボールを何に使うの」
E児：「えっとね。ダンボールに道をかくの。そうすれば車が走れるでしょ」
教師：「なるほど。楽しそうね。車を走らせるのだと、ここだと狭くないかな？」
E児：「遊戯室がいいかな。先生、手伝って」教師とダンボールを運ぶと道をたくさん描いていく。
J児：「あ、いいなあ。僕も入れて」
E児：「いいよ」
J児K児L児が加わり、一緒に道を描いたり、ダンボールに洗車場を合体させたりする。
K児：「こっちは、高速道路にしよう」
J児：「店とかもあつたらいいんじゃない」
E児：「そうだね」保育室の製作かごから切り紙のおうちを出し、ダンボールに貼る。
E児J児K児らが、ダンボールの上で車を動かしているところに、3歳クラス児が集まってくる。3歳クラス児：「ぼくもやりたい」
E児：「いいよ。あっ！ちょっと待ってて」保育室でチケットをつくり、遊戯室に戻る。
E児：「みんな、聞いて！このチケットがあると、ここで車が走らせられます」
3歳クラス児：「チケットちょうだい」
E児：「はい、どうぞ。好きな車で走らせていいよ」
J児：「こっちは、洗車場だよ。こっちはいいよ」

J児K児F児は、保育室で洗車場を囲んで3人で遊んでいた。洗車場、ガソリンスタンド、ジャッキアップコーナーを回るように車を動かしている姿を見て、車からイメージしたものをつくり、そこで車を動かすことを楽しんでいると感じた。保育室にいたE児が、車を走らせる遊びに使うかもしれないと

コメントの追加 [h2]: 目の前にいる幼児の思いを大切にしている、まずは読み取りから援助を考えるという指摘があった。教師は、これまで見聞きしてきた遊びの様子や車自体がもつ特徴など様々な情報をもっている。しかし、それらにとらわれず、目の前にいる幼児のしていることをニュートラルな視点で捉えることを援助を考える上での前提としている。また、その心もちを振り返りタイムで確認することも大切にしている。

¹⁶前日からの様子から車をつくりたがっていたK児の思いを理解していたからこそ、K児の思いに寄り添い称賛することができた

(b) できた事そのものではなく、その過程である頑張りを褒めている (c)

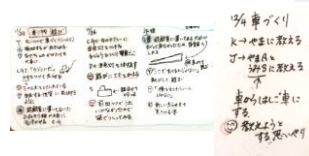
¹⁷情報共有により、色々な可能性を考え、それに応じた環境が準備できる (b)

¹⁸幅広く援助しようとして過去の学びの様子を聞くが、それにとらわれず目の前の幼児のしていることをしっかり読み取って援助しようとしている。こうした準備と心もちが保育の上では不可欠 (a)

¹⁹幼児の思いを大切にしている。「昨年こうだったから」ではなく「この子はどうしたいのか？」を考えている (b) すぐに援助するのではなく、まずは読み取りを行う (c) いつも (例年) やっていたからではなく、目の前の幼児に寄り添った援助をしている (g)

思い、壁際に置いてあった大きなダンボールを見付け²⁰て、遊び始めた。大きなダンボールを広げ、道を描いている様子が車が動く町のイメージに見えたのだろう。J児たちもそこへ合流し、道を描いたり洗車場を合体させたりし、車を走らせる町のようなものをつくって遊びが進んだ。ダンボールを保育室か遊戯室に移動させたことは、多くの幼児の目に触れることになった。²¹興味をもった3歳クラス児のために、E児はチケットをつくり、J児たちも年下の幼児に声をかけていた²²。これまでより年下の幼児や他の友達とのやりとりが増え、かかわりの広がりを感じた。

その後、11月下旬から12月上旬にかけて、つくった車に紐を付けてラジコンのように走らせたり、タクシーからパトカーに改造し警察ごっこをしたりしながら、車を使った遊びは続いていった。この間に、走る車のしくみを教えてもらいにきた4歳クラス児に、H児やJ児がタイヤが回るやり方をつくって見せながら教えることもあった。車が遊びのアイテムとなり、イメージを膨らませながら遊ぶ姿を情報共有していった。



12月11日

5歳保育室に遊びに来た3歳クラス児が、飾り棚の上の車を見ている。
 3歳クラス児：「車、貸してください」
 F児J児：「これ使っているよ」自分がつくった車を渡す。
 教師：「そうそう、前につくった町もあるよ」ダンボールを遊戯室に広げ、3歳クラス児と一緒に車を動かして遊ぶ。
 F児K児L児M児らが遊戯室に来る。J児は洗車場を横に並べる
 L児：「こうしたらどうかね」ダンボールの端を持ち上げて車を置くと、車が下っていく。
 L児：「車、滑るよ」
 教師：「わー、面白いね」
 教師はダンボールの端を持ち上げる手伝いをする。L児は、また車を滑らせる。
 教師：「ここ、どうする？」ダンボールの端を持ち上げているところを見ながら言う。
 L児：「あれがいいけど、使っているしなあ」ゲームボックスを見て言う。
 ゲームボックスのほとんどを遊戯室でおうちごっこをしていた5歳クラス児が使っていた。
 教師：「みんなで使うものだから、使いたって言うてみたらどうかね？」
 L児：「そうする」
 L児はおうちごっこをしている5歳クラス児のところへ交渉に行き、2つ分けてもらう。教師はその様子を側で見守る。L児は、ゲームボックスの上にダンボールの端を乗せるとテープで貼る。
 ダンボールを貼ったところからL児や仲間入りしたF児K児らは自分の車を走らせる。下まで進むこともあれば、ダンボールがたわみ、途中で止まることもある。
 教師：「ここで止まっちゃうね²³」ダンボールの中央を見て言う。
 K児：「ここに積木を入れよう」
 L児：「あ、それいいじゃん」
 M児：「こっちもあった方がいいよ」
 K児L児は、ダンボールの下に積木を入れてダンボールに傾斜がつくように調整する。
 L児：「ここから落ちちゃうんだよな。ガードレールがいる。積木持ってきて」
 L児は、ダンボールの側面を立ち上げると、友達が持ってきた積木で支える。
 教師：「おー、車が最後まで進むようになったねえ」
 K児：「ここは、トンネルになったよ」ダンボールの下に置いた積木の間にもぐってM児やL児と車を走らせる。

L児がダンボールの端を持ち上げて、車を走らせることを試した際、L児が新しく試そうとしたことを実現できるように援助しようと考えた。L児がダンボールを置く台にしようとしたゲームボックスは、他の遊びに全部使われていた。L児にとってもゲームボックスのほとんどを使っていた友達にとっても、自分の気持ちを伝えたり相手の考えを聞いたりして共有物をどう使うか考える機会になると考

²⁰幼児の様々な思いに応えようとする。しかし使うのは幼児が必要としたタイミングで (a)

²¹自然と異年齢のかかわりが生まれる (b)

²²年下の幼児も遊べるよう、工夫している (チケットづくり) (b)

²³幼児自身がどうしたら良いかを考えられるような言葉かけ (b)

え、L児が交渉する様子を側で見守った²⁴。L児は自分の思いを伝え、ゲームボックスを2つ分けてもらおうと、立体的な坂ができた。集まってきた友達や年下の幼児が次々に車を走らせる中で、ダンボールの形状から最後まで車が進まなくなった。どうしようかと試行錯誤したり協力したりする姿を大切にしたいと考え援助は控えめにした²⁵。

12月14日

L児：「またダンボールの遊び、やりたい」
教師：「この前、楽しかったよね」保育室に片付けておいたダンボールをL児と遊戯室に広げる。
K児M児が加わり、前回遊んだときのように、ゲームボックスや積木を並べ、ダンボールの坂をつくる。
4歳クラス児：「ぼくもやりたい」
L児：「いいよ」
K児は、坂の上に細いダンボールを渡すように貼り付ける。
L児：「Kくん、これ何？」
K児：「橋だよ」細いダンボールの上で車を動かすとダンボールがたわむ。
L児：「でも、壊れそうだよ」
K児：「これで大丈夫」細いダンボールの真下に積木を置き、柱のようにする。
L児：「いいね。ここもトンネルになるじゃん」
教師：「本当だ。下にも上にもトンネルがあつてすごいね」
L児：「ここからスタートさせたらいいんじゃない？」
K児：「よし、やろう」
K児L児は4歳クラス児と坂の上の橋やトンネルで何度も車を走らせる。

週末をはさんだ14日、11日につくった場にさらに新しいアイデアを出し合いながら、幼児同士でダンボールと積木などを使い車のコースをつくっていた。教師はそのアイデアを²⁶称賛する言葉をかけながら、その様子を見守った。振り返りタイムでは、これまでの遊びの経験から、車を動かす場が坂道の町のように発展し、協同して遊ぶ姿が見られたことを共有した。車を動かすことと車が走る場をつくることの両方を楽しむ姿から、自分たちがやりたい目的に合わせて、友達同士で遊びをつくり進めていく育ちを感じた。

考察

室内遊びが中心となった11月以降、製作に没頭する幼児の様子から、製作したものを活かして遊びを展開する援助について考えてきた。新型コロナ感染症予防のため、例年とは違い、つくったものをその場に残すことはできないが、つくったものをレストランごっこなどに繰り返し活かして遊ぶ姿も見られていた。例年とは違う状況でも遊びが充実することによって様々な力が育まれていくことを願っていた。

製作遊びが保育室でできるようになると、E児の乗り物をはじめ、オムライスやピザなど、この頃の5歳クラス児がつくるものは見た目の本物らしさにこだわり工夫していることが多かった。またゴムの伸縮や水流などの性質を遊びに活かす姿もあった。そこで、乗り物づくりに性能としての本物らしさに気付けるような援助²⁷をすることで、新たな試行錯誤が生まれ継続した遊びになるのではと考えた。タイヤが回転する車ができたとき、教師は昨年度の様子から、車のスピードに興味をもつようになるのではと予想していた。しかし、スピードより車が動いている町のような場をつくることを楽しむ様子を感じ、援助の方向性に悩んだ。その援助を考える拠り所になったのはカンファレンスで得た『幼児のしていることを肯定的に捉える』という共通認識²⁸である。幼児が何に興味があり何をし

コメントの追加 [h3]: 幼児の遊びの様子や発達段階に合わせて援助の仕方を考えているという指摘があった。発達段階として5歳クラスでは、遊びの中で双方向のやりとりや目的の共有、協力といった仲間との協同の様相が見られるようになる。このような姿を支援したいと願っているが、同じ遊びの場に集まっている、やりたいことは一人一人異なることもある。今回L児がダンボールに傾斜をつけたことから、そこにいた仲間が坂で車を滑らせたという思いが生まれていた。遊びに寄せる共通した思いを感じたため、仲間と協同して遊ぶ姿につながるように、援助の仕方や立ち位置など、その場の様子から判断している。

²⁴交渉する際に担任が側にいた事で安心して思いを伝えられたと思う。これまで友達に対し遠慮がちだった姿を理解した上での援助である (f) すぐに教師が出るのではなく、幼児自身に考えさせている (g)

²⁵幼児の様子を見ながら援助の仕方を考えている。何を育てたいのか教師の願いが見える (a) 幼児の実態、発達段階に合わせ、援助を控えめにしている (b) 幼児の遊びの様子を見ながら、あえて援助を控えめにすることで育つ力があり、そんな姿を大切にしていきたいと感じた (f)

²⁶車ではなく、アイデアを称賛 (c)

²⁷幼児主体の援助 (c)

²⁸カンファレンスでの話題が援助に活かされている。幼児の思いを大切にしている (b)

ようとしているのか、その読み取りを大切に²⁹という基本に立ち返ることができた。洗車場や道路をつくる姿に車がジオラマのような町で動くイメージで遊びを楽しんでいる姿を感じ、その遊びの中でかかわりが広がり、仲間同士で試したり協力したりしていくことを願って援助を考えていくようになった。車の遊びが始まった頃は、同じ空間にいても、それぞれがしたいことをしていて双方向のやりとりは少なかった。遊びが展開するにつれて、その場にいた仲間で言葉を交わし、考えを出し合っ

て協同的に遊ぶ姿が見られるようになった。遊びの中で、年下の幼児に快く車を貸したり、つくり方を教えたりする年上らしい姿も見られた。遊戯室を遊びの場としたり、保育室の飾り棚に乗り物を置いておけるようにしたりすることで、遊びにかかわる幼児だけでなく、多くの幼児の目に自然と触れることになった³⁰。これも遊びやかかわりの広がりにつながる一つの環境構成になったのではないかと考える。

車といっても、幼児が抱くイメージや興味は一人一人異なる。日々、幼児が遊ぶ様子を情報共有して幼児の思いを読み取ること、読み取った思いに添った援助を考えていくこと。その積み重ねが、つくったものを活かして遊びを広げることにつながる³¹ことを実感した。

²⁹幼児の思いを大切にしている (a)

³⁰環境の工夫により遊びが広がったり異年齢でのかかわりが生まれたりしている (b)

³¹日々の振り返りでの情報共有が援助を考えていく上で、大きな意味をもつ (b)

<5歳クラス Ⅱ期 1～2月>「幼児の伸びようとする力を信じて待つ」

これまでの保育の様子

5歳クラスでは、幼児同士で思いを伝え合う機会を大切にしてきた。様々な経験を積み重ねてきた5歳クラスは自分の思いを伝えたり、相手の思いや立場を理解したりした上で、どのようにしていかか考えて遊びや活動を進めていくようになる。「みんな」の時間で「ルールのある遊び」を行う際にルールを決めるときや、収穫した作物をどのように分けたり届けたりするか決めるとき、教師は話したい、伝えたいという幼児の思いを大事にしたいと考えてきた。話し合う時間を十分に保障するとともに、教師側の都合で方向性を決めたり話をまとめたりすることは避けてきた。みんなで決めたルールで遊んだり活動したりした後に感想を聞くと、「みんなで楽しくできてよかった」「今度はもっとこうしたい」など、話し合っただけで決めるよさを感じている様子があった。遊びの中でも、思いがぶつかったりすれ違ったりしてトラブルになり話し合うことがある。幼児同士が話し合っただけで解決する姿を大事にしたいと考えて援助してきた。

雪が降り始めた12月、幼児が「先生、一輪車やりたいな」とつぶやいた。例年、3学期になると遊戯室に大縄跳びや一輪車、カプラなどが出される。それを心待ちにしている幼児の姿を話題にしていた。3学期になり、遊戯室に大縄跳びや一輪車などが出されると、多くの幼児がこれらの遊びに取り組んでいた。一輪車は簡単には乗れるようにはならないが、諦めずに挑戦し続ける姿や、乗ることができる幼児が教えたり励ましたりする姿があった。粘り強く挑戦したり、助け合ったりする姿を大切にするため、幼児同士のかかわりを大切にしていこう確認していた。

1月26日

N児：「Mちゃん、どうしたの？」

M児：「メリーゴーランドしたいんだけど、できない」

O児：「私もね、転んで転んで、転んでばかりだったよ」

N児：「ゆっくりやってみたらいいんじゃない。Mちゃん、ゆっくりやろうよ」

M児：「うん」

N児が一輪車をこぎながら手を伸ばす。M児はその手を握るがバランスが崩れる。

N児：「もう一回、やろう」

M児：「うん」

何度か試すうちに、二人で回れるようになる。

教師：「よかったねNちゃん。メリーゴーランドになっているよ」

O児：「ねえ、私も入っていい？」

M児：「いいよ」

O児：「じゃあ、行くよ」M児N児がやっているメリーゴーランドに合流する。

教師：「すごい、3人で回ってる。みんな、すごいね」

同じ時期に挑戦し始めた一輪車であるが、乗れるようになるタイミングは一人一人異なる。何人かの友達が乗れるようになる中、なかなか乗れるようにならないことにもどかしさを感じている幼児がいることを共有していた。時には、養護教諭に転んだ手当をしてもらいながら気持ちを和らげてもらうこともあった。しかし、一輪車乗りを諦めることはなく、再び挑戦する表情や姿から、もどかしさや悔しさ以上に、乗れるようになりたいという強い思いを感じていた。そして、幼児同士で、練習をしている友達にコツを教えたり、アドバイスをしたり、できた時に「すごい」と自分のことのように喜んだりしていた。このような姿をたくさん見ていたので、教師が一輪車に乗るための援助は行わず、幼児と同じように一輪車の練習をしながら幼児同士のやりとりをそっと見守った。そして、幼児のがんばりや幼児同士が協力していることを認めたり称賛したりする言葉かけをするようにしていた。

一輪車に乗れるようになると、次にやってみようという思いが生まれていた。M児が一輪車でメリーゴーランドの技に挑戦してうまくいかなかったとき、O児はM児の気持ちに共感する言葉をかけ、N児はM児にアドバイスして一緒に挑戦した。相手の思いを聞き、その思いを理解してかかわる姿に5歳クラスの育ちを感じ、振り返りタイムで共有した。これからも一輪車や他の遊びで、トラブルやうまくいかないことがあると予想されるが、幼児同士のやりとりを大切にするために、教師が声をかけたり仲介したりするタイミングを見極めていこうと確認した。

2月5日

「みんな」の時間に、お楽しみ発表会について話題を出し、やりたいことが決まっているか尋ねる。一輪車に乗れるようになった幼児が増え、一輪車をやりたいという幼児は6人であった。幼児の思いを聞いている中で、「一緒にやる人と相談したい」という意見がでる。その幼児の言葉を受け、それぞれのグループで話し合いを始める。一輪車をやりたい6人も集まって話し合い、3人ずつに分かれてやろうという話になる。3人グループが決まると、遊戯室に行き、そのグループで一輪車をやってみる。

昼食の時間が近付いたため教師が遊戯室に声をかけに行くと、幼児たちが沈んだ表情で戻ってくる。

N児：「私、やっぱりみんなでやりたい」

教師：「そうなの。他の友達はどうなんだろうね。後で相談する？今、話したい？」

N児：「今がいい」

教師：「一輪車チームさん。Nちゃんが、もうちょっと相談したいみたいなんだけど、どう？」

どの幼児も「話したい」と言って集まってくる。

N児：「3人でやってみただけど、やっぱりみんなでやりたい」

O児：「私も、みんなでやりたい」

P児：「私は、チームでもやったり、みんなでもやったりしたい」

M児：「チームで分かれてやりたい。だって、メリーゴーランドやりたいから」

P児：「私もそうだよ。Nちゃんたちと3人でメリーゴーランドやりたいし。でもみんなでするのもやりたい」

O児：「私だって、Nちゃんとやりたかったけど、3人と3人にならなかったから、違うチームに動いたんだよ」

Q児：「でも、Oちゃんが始めに3人ずつにしようって言ったんだよ」

O児：「そうだけど、全然チームが決まらなかったし。みんなでもっと違うことがしたい」

N児：「何か、いつもより楽しくなかった」

P児：「うん・・・」

教師：「そうかあ。やってみたら何か違ったんだね。RちゃんとQちゃんはどう？」

R児：「私は、みんなで力を合わせて一輪車をやりたい」

Q児：「いつもの遊びのときみたいにやりたい」

教師：「そうかあ。どうしたらいいんだろうね。お楽しみ発表会まで、もう少し時間はあるからね」

お楽しみ発表会まで2週間となったこの日、「みんな」の時間に幼児の思いを確認する時間をとった。3歳クラス、4歳クラスの時のお楽しみ発表会で5歳クラスが披露した発表を見てきている。一輪車や大縄跳びなどの発表をした姿を見て、あこがれや期待感をもっている様子を感じていた。クラスの中には、まだやりたいことがはっきりしていない幼児もいて、担任副担任は思いを聞き取っていた。その間、一輪車を発表することにした6人は、3人ずつのグループに分かれようと話し合っていたが、なかなか決まらず揉めている様子を感じていた。しばらくして3人グループが決まり、遊戯室で試していた。教師は、昼食の時間が近付いたため、保育室に戻ってきた幼児の表情を見て、もやもやしている様子を感じた。幼児のつぶやきからもその様子を感じ、みんなで話し合いたいかどうか尋ねた。話したい気持ちのときに話すことが主体的な話し合いのために大切と考え、副担任に事情を伝えて、その場で話し合いの続きをすることにした。

教師はその場に立ち会い、幼児たちが友達に伝える思いを聞いていた。思いはそれぞれであるが、お楽しみ発表会までまだ日数がある。今の思いを伝え合ったことで、これから自分たちで一輪車に取り組みながら考えていこう。焦ってこの場で結論を出さなくてもよいと考え、幼児が自ら考えられるような言葉をかけるとともに、まだ考える時間があることを知らせた。

週が明け、その後もそれぞれのペースで一輪車に取り組んでいた。誰と誰がペアと決めることはしないで、その場にいる幼児同士で、「メリーゴーランドやろう」「私も入る」「行くよ」と声をかけ合ったりアイコンタクトでタイミングを計ったりしていた。3人でできれば4人目が入るといったように、その場でやりたいことを考え、楽しんで乗っていた。話し合いで幼児が言っていた「みんなでやりたい」「いつもの遊びのときみたいにやりたい」という思いは、この遊びの姿のことなのだろうと理解した。また、一輪車ですれ違う際に手をタッチするなど、新しい乗り方を考えたり、乗り方が次々に更新されていく姿から、お楽しみ発表会でどのように発表するかは、幼児から話が出るまで待っていようと改めて確認した。

2月17日

5歳クラスのお楽しみ発表会が二日後となり、教師は発表中に流す音楽の確認を各グループにしている。一輪車グループの番になり、MNOPQR児が集まる。

教師：「音楽は「アナと雪の女王」と「なわとびダンス」と「夜に駆ける」でよかったかな？」

幼児たちは「うん」と返事をしたりうなづいたりする。

O児：「あっでも、まだ何やるか決まってない。どうする？」

R児：「みんなでメリーゴーランドしたいな」

O児：「6人でやって、歌の終わりの時に花火みたいにしたい」

Q児：「うん。それでいい」

片方の手を6人でつなぎ、もう片方は肩の高さに上げて、動きの確認をする。

O児：「それでいい人、手を挙げて」

4人が手を上げる。

O児：「NちゃんとPちゃんはどうしたいの？」

P児：「考えているんだけど、今はまだないの」

N児：「私は、バトンを持って、メリーゴーランドしたい」

M児：「じゃあ、バトンを持ってみんなでメリーゴーランドしようよ」

N児をはじめ、みんなが同意する。

教師：「じゃあ、見せ合いの時みたいに自由に乘って、最後にバトンを持ってメリーゴーランドをやって終わりということかな？」

M児：「私、本当はこの前の見せ合いの時、最後に6人で手をつなぎたくて、みんなを呼んだけど、気付いてくれなかった」

P児：「え、そうなの？分からなかった」

M児：「6人で手をつないで丸くなるのもやりたい」

Q児：「難しいかも…。後で練習しようよ」

4歳クラス児のお楽しみ発表会が終わり、3歳クラス5歳クラス児が遊戯室で遊び出す。MNO PQR児は遊戯室に行き、一輪車に乗り始める。

Q児：「みんな来て。さっきのやってみよう」

6人が補助用の横棒につかまって、横一列に並ぶ。

O児：「行くよ、せえの」

左右の端にいる幼児が手をつなごうとするが、途中でバランスが崩れて一輪車が倒れる。

M児：「真ん中は、難しい…」

P児：「私、真ん中でいいよ」

M児：「ありがとう」

N児：「もう1回やろう。せえの」

左右の端にいた幼児の手がつながり、一瞬、6人が大きな輪になる。

教師：「みんなすごい、一瞬つながってたよ。よかったねMちゃん」

M児：「うん」

O児：「これもお楽しみ発表会でやろうよ」

「いいよ」「分かった」と他の幼児たちが賛同する。

遊びの時間、幼児同士で新しい乗り方を試しては「一輪車でバトンのリレーやろう」「いいよ」などのやりとりをする姿を見てきた。主体的に取り組む様子を感じつつも、6人で集まって相談することはなく、内心焦りを感じていた。しかし、あくまでも幼児自身の主体的な話し合いであってほしいと願っていた。担任副担任とで情報交換する中で、遊びの時間は一輪車に乗ったり技に挑戦したりすることに熱中しているため、6人で集まって話し合うきっかけがないのかもしれないと話した。そこで、幼児が保育室にいるタイミングで、発表の内容には触れずに、BGMの確認という形で6人が集まる機会をもてるようにしてみることにした。

BGMの確認の後で、発表の内容について幼児の自発的な発言から話し合いが始まった。教師は、幼児同士のやりとりの妨げにならないように、幼児の輪の外に出て話し合いを見守った。O児が発言をしていなかったN児とP児の意見も求める姿がありうれしく思った。2学期に収穫物を届ける話し合いをしたときに、幼児同士で意見を言っていない仲間のことも気遣う姿があった。そのような姿が

別の場面でも自然と見られたことに、仲間を大切にしよう、みんなで協力していこうという気持ちを感じた。また、Q児はM児の提案に難しさをつぶやきながらも、受け入れて前向きにやってみようと発言していた。実際に試して達成感を得て、お楽しみ発表会へ期待感が高まる様子を感じた。主体的に話し合う姿を協力して挑戦していた姿を振り返りタイムで話題にし、幼児の伸びようとする姿を信じて待っていたよかったと語り合った。

考察

自発的な遊びの中では、同じ遊びをしている仲間同士であってもやりたいイメージや思いが異なることがある。調整したり折り合いを付けたりする過程でトラブルも起こる。しかし、これまでの「みんな」の時間での話し合いを経験してきた5歳クラスである。自発的な遊びの場面でも、話し合ったり相談したりして、みんなで気持ちよく遊ぶよさを感じてほしいと願っていた。今回、一輪車を発表したいと集まった仲間も、グループで分かれてやりたいという思いとみんなでやりたいという思いが交錯していた。まだ日数があつたため、結論を急ぐことはしなかった。いよいよお楽しみ発表会が直前になり、お楽しみ発表会への思いも高まっていたのだろう。どんなことをしたいのか思いを伝え、みんなでやってみようという雰囲気になった。そして、話し合ったことをやってみたら楽しかった、嬉しかったといった思いは、仲間で協力するよさを感じることに繋がったと考える。ばらばらに好きなことをしていても楽しい。でも、やりたい仲間同士で話し合ったり協力したりして取り組むととっても楽しいという経験をした幼児。お楽しみ発表会が終わってからも、「大技やってみよう」「こつが分かったよ。みんな聞いて」など、その場で話し合いながら、一輪車遊びを継続していた。

幼児同士で励まし合う姿、コミュニケーションをとって遊びを進める姿、次から次へと新しい工夫を取り入れて挑戦する姿などから、よりよくかかわる力やがんばる力の成長を捉えた。その姿や育ち、変容を振り返りタイムで語り合ってきた。このように幼児の育ちを理解した上で、幼児の姿から感じられた自ら伸びようとする気持ちを大事にした。それが、幼児自身が実体験として仲間とかかわるよさを感じ、自らよりよくかかわろうとする気持ちを支えることに繋がったと考える。

<5歳クラス Ⅱ期 1～2月>「幼児の力を信じて待つ」

これまでの保育の様子

5歳クラスでは、幼児同士で思いを伝え合う機会を大切にしてきた。様々な経験を積み重ねてきた5歳クラスは、自分の思いを伝えたり、相手の思いや立場を理解したりした上で、どのようにしていくか考えて遊びや活動を進めていくようになる。「みんな」の時間で「ルールのある簡単な遊び」を行う際に、ルールを考えるときや、作物を収穫した際に、どのように分けたり届けたりするか決めるとき、教師は話したい、伝えたいという幼児の思いを大事にしてきた。話し合う時間を十分に保障するとともに、教師側の都合で方向性を決めたり話をまとめたりすることは避けてきた。¹みんなで決めたルールで遊んだり活動したりした後感想を聞くと、「みんなで楽しくできてよかった」「今度はもっとこうしたい」など、話し合っただけのよさを感じている様子があった。遊びの中でも、思いがぶつかったりすれ違ったりしてトラブルになり話し合うことがある。幼児同士が話し合っただけで解決する姿を大事にしたいと考えて援助してきた。

雪が降り始めた12月、幼児が「先生、一輪車やりたいな」とつぶやいた。例年、3学期になると遊戯室に大縄跳びや一輪車、カブラなどが出される。それを心待ちにしている幼児の姿を話題にしていたところだった。遊戯室に大縄跳びや一輪車などが出されると、多くの幼児がこれらの遊びに取り組むようになった。一輪車は簡単には乗れるようにはならないが、諦めずに挑戦し続ける姿や乗ることができると幼児が教えたり励ましたりする姿があった。粘り強く挑戦したり、助け合ったりする姿を大切にしたいため、幼児同士のかかわりを大切にしていこう確認していた。²

コメントの追加 [h1]: 幼児が自ら話そうとする思いを大切にしていることに多くの共感を得た。これは幼児の自発的な遊びを大切にしていることと共通した心持と言えよう。そして、思いを伝え合う先に、友達の思いを聞いて、受け入れたり折り合いを付けたりすることを大事にしている。教師の都合で話し合いの方向性を決めないことは、これらの経験を保障することにつながる。

1月26日

多くの幼児が一輪車に取り組む中、M児が側で一人で立っている。
N児：「Mちゃん、どうしたの？」
M児：「メリーゴーランドしたいんだけど、できない」
O児：「私もね、転んで転んで、転んでばかりだったよ」
N児：「ゆっくりやってみたらいいんじゃない。Mちゃん、ゆっくりやろうよ」
M児：「うん」
N児が一輪車をこぎながら手を伸ばす。M児はその手を握るがバランスが崩れる。
N児：「もう一回、やろう」
M児：「うん」
何度か試すうちに、二人で回れるようになる。
教師：「よかったねNちゃん。メリーゴーランドになっているよ」
O児：「ねえ、私も入っていい？」
M児：「いいよ」
O児：「じゃあ、行くよ」M児N児がやっているメリーゴーランドに合流する。
教師：「すごい、3人で回ってる。みんな、すごいね」

同じ時期に挑戦し始めた一輪車であるが、乗れるようになるタイミングは一人一人異なる。何人かの友達が乗れるようになる中、なかなか乗れるようにならないことにもどかしさを感じている幼児がいることを副担任と共有していた。時には、養護教諭に転んだ手当してもらいながら気持ちを和らげてもらうこともあった。しかし、一輪車乗りを諦めることはなく、再び挑戦する表情や姿から、もどかしさや悔しさ以上に、乗れるようになりたいという強い思いを感じていた。そして、幼児同士で、練習をしている友達にコツを教えたり、アドバイスをしたり、できた時に「すごい」と自分のことのように喜んだりしていた。このような姿をたくさん見ていたので、教師が一輪車に乗るための援助は行わず、幼児と同じように一輪車の練習をしながら幼児同士のやりとりをそっと見守った。そして、幼児のがんば

¹ 話し合いの中には、思いを伝える、受け入れる、折り合いをつける、自分のことだけでなくみんなのことを考えるなどの様々な要素がある。こうした話し合いで育ち要素をしっかりと育てるためには必要感のある話し合いの場が必要 (a) 教師が導くのではなく、幼児が自分の言葉で話すことを大切にしている (b) 教師主導ではなく、幼児発信である (c) 幼児主体の活動である (d) 幼児の思いを大切にし、その思いを引き出そうとする援助をしている (g)

² 友達同士で励まし合う姿「私もできなかった」と相手の気持ちに寄り添えるやさしさ (b) 決して一輪車に乗れる、大縄が跳べるといったスキルの上達を目標にしていない (c)

りや幼児同士が協力していることを認めたり称賛したりする言葉かけ³をするようにしていた。

一輪車に乗れるようになると、次にやってみたいことへの思いが生まれていた。M児が一輪車でメリーゴーランドの技に挑戦してうまくいかなかったとき、O児はM児の気持ちに共感する言葉をかけ、N児はM児にアドバイスして一緒に挑戦した。相手の思いを聞き、その思いを理解してかかわる姿に5歳クラスの育ちを感じ、振り返りタイムで共有した⁴。これからも一輪車や他の遊びで、トラブルやうまくいかないことがあると予想されるが、幼児同士のやりとりを大切にするために、教師が声をかけたり仲介したりするタイミングを見極めていこうと確認した⁵。

2月5日

「みんな」の時間に、お楽しみ発表会について話題を出し、やりたいことが決まっているか尋ねる。一輪車に乗れるようになった幼児が増え、一輪車をやりたいという幼児は6人であった。幼児の思いを聞いている中で、「一緒にやる人と相談したい」という意見が出る。その幼児の言葉を受け、それぞれのグループで話し合いを始める。一輪車をやりたい6人も集まって話し合い、3人ずつに分かれてやろうという話になる。なかなか決まらない様子であったが、3人グループがようやく決まると、遊戯室に行き、そのグループで一輪車をやってみる。

昼食の時間が近付いたため教師が遊戯室に声をかけに行くと、幼児たちが沈んだ表情で戻ってくる。

N児：「私、やっぱりみんなでやりたい」

教師：「そうなの。他の友達はどうなんだろうね。後で相談する？今、話したい？⁶」

N児：「今がいい」

教師：「一輪車チームさん。Nちゃんが、もうちょっと相談したいみたいだけど、どう？」

どの幼児も「話したい」と言って集まってくる。

N児：「3人でやってみたけど、やっぱりみんなでやりたい」

O児：「私も、みんなでやりたい」

P児：「私は、チームでもやったり、みんなでもやったりしたい」

M児：「チームで分かれてやりたい。だって、メリーゴーランドやりたいから」

P児：「私もそうだよ。Nちゃんたちと3人でメリーゴーランドやりたいし。でもみんなでするのがやりたい」

O児：「私だって、Nちゃんとやりたかったけど、3人と3人にならなかったから、違うチームに動いたんだよ」

Q児：「でも、Oちゃんが始めに3人ずつにしようって言ったんだよ」

O児：「そうだけど、全然チームが決まらなかったし。みんなでもっと違うことがしたい」

N児：「何か、いつもより楽しくなかった」

P児：「うん・・・」

教師：「そうかあ。やってみたら何か違ったんだね。RちゃんとQちゃんはどう？」

R児：「私は、みんなで力を合わせて一輪車をやりたい」

Q児：「いつもの遊びのときみたいにやりたい」

教師：「そうかあ。どうしたらいいんだろうね。お楽しみ発表会まで、もう少し時間はあるからね」

お楽しみ発表会まで2週間となったこの日、「みんな」の時間に幼児の思いを確認する時間をとった。

7

3歳クラス、4歳クラスの時のお楽しみ発表会で5歳クラスが披露した発表を見てきている。一輪車や大縄跳びなどの発表をした姿を見て、憧れや期待感をもっている様子を感じていた。クラスの中には、まだやりたいことがはっきりしていない幼児もいて、担任副担任は思いを聞き取っていた。その間、一輪車を発表することにした6人は、3人ずつのグループに分かれようと話し合っていたが、なかなか決

³ 教師は出過ぎず、でも幼児のがんばりは称賛している。認めてもらっている安心感 (b) うまくなることはゆっくりでも、心の成長が促される環境にある (c)

⁴ 担任と副担任が情報共有することで、同じ方向性で保育することができる (d)

⁵ 方向性を確認することで同じ心持ちで保育ができる (b) その場ですぐに援助とせず、幼児の思いや願いをしっかりと捉えてから援助しようとしている (c) 事前に予想される幼児の動きに対しての教師の働きかけについて共有されていたため、担任副担任が同じような援助ができたのだと感じた (f) 幼児同士のかかわりを優先している (g)

⁶ 幼児自身が考えられる言葉かけ (b) 幼児の様子から幼児の思いを察し、その場で話し合いの時間をつくっている (g)

⁷ 自分の思いを友達に伝える時間は大切 (d)

コメントの追加 [h2]: 遊びの中では、トラブルや思うようにいかないことがある。このようなとき、どうしたらよいか幼児自身が考え、解決したり乗り越えたりする経験を積むことで、よりよくかかわる力やがんばる力が育っていくと考える。だからこそ教師は、幼児の姿を捉えた上で、援助に入るタイミング見計らっている。また、援助に対する方向性を職員間で確認しておくことで、様々な遊びの場面でも同じ心持ちで援助することができる。

まらず揉めている様子を感じていた。しばらくして3人グループが決まり、遊戯室で試していた。教師は、昼食の時間が近付いたため、保育室に戻ってきた幼児の表情を見て、もやもやしている様子を感じた。幼児のつぶやきからもその様子を感じ、みんなで話し合いたいかどうか尋ねた。話したい気持ちのときに話すことが主体的な話し合いのためには大切と考え、⁸副担任に事情を伝えて、その場で話し合いの続きをすることにした。

教師は側で、幼児たちが友達に伝える思いを聞いていた。思いはそれぞれであるが、お楽しみ発表会までまだ日数がある。今の思いを伝え合ったことで、これから自分たちで一輪車に取り組みながら考えていこう。焦ってこの場で結論を出さなくてもよいと考え、⁹幼児が自ら考えられるような言葉をかけるとともに、まだ考える時間があることを知らせた。

週が明け、その後もそれぞれのペースで一輪車に取り組んでいた。誰と誰がペアと決めることはしないで、その場にいる幼児同士で、「メリーゴーランドやろう」「私も入る」「行くよ」と声をかけ合ったりアイコンタクトでタイミングを計ったりしていた。3人でできれば4人目が入るといったように、その場でやりたいことを考え、楽しんで乗っていた。話し合いで幼児が言っていた「みんなでやりたい」「いつもの遊びのときみたいにやりたい」という思いは、この遊びの姿のことなのだろうと理解した。また、一輪車ですれ違う際に手をタッチするなど、新しい乗り方を考えたり、乗り方が徐々に工夫されたりしていく姿から、お楽しみ発表会でどのように発表するかは、幼児から話が出るまで待って¹⁰と改めて思い、副担任に伝えた。

2月17日

5歳クラスのお楽しみ発表会を二日後に控え、教師は発表中に流す音楽の確認を各グループに行っている。一輪車グループの番になり、MNOPQR児が集まる。

教師：「音楽は『アナと雪の女王』と『なわとびダンス』と『夜に駆ける』でよかったかな？」

幼児たちは「うん」と返事をしたりうなずいたりする。

O児：「あっ、でも、まだ何やるか決まってない。どうする？」

R児：「みんなでメリーゴーランドしたいな」

O児：「6人でやって、歌の終わりの時に花火みたいにしたい」

Q児：「うん。それでいい」

片方の手を6人でつなぎ、もう片手は肩の高さに上げて、動きの確認をする。

O児：「それでいい人、手を挙げて」

4人が手を上げる。

O児：「NちゃんとPちゃんはどうしたいの？」

P児：「考えているんだけど、今はまだないの」

N児：「私は、バトンを持って、メリーゴーランドしたい」

M児：「じゃあ、バトンを持ってみんなでメリーゴーランドしようよ」

N児をはじめ、みんなが同意する。

教師：「じゃあ、見せ合いの時みたいに自由に乗って、最後にバトンを持ってメリーゴーランドをやって終わりということかな？」

M児：「私、本当はこの前の見せ合いの時、最後に6人で手をつなぎたくて、みんなを呼んだけど、気付いてくれなかった」

P児：「え、そうなの？分からなかった」

M児：「6人で手をつないで丸くなるのもやりたい」

Q児：「難しいかも…。後で練習しようよ」

⁸ これこそ必要感のある話し合いの場。昼食だからと切り上げなかった対応は、状況によるが支持したい (a) 幼児の姿から判断し、その場で話し合いの場を設けている。“その時”だったからこそ言いたいことが言えた (b) つぶやきから援助をつくる。幼児の思いを第一に考えている (c) 幼児主体の保育である。伝え合い、解決していくための大切な話し合いになっている (d) その時の幼児の思いを優先している (g)

⁹ 教師の都合で急かすことはせず、今後を見通して見守りながら考えていこうとする教師の心のゆとり (a) 幼児自身が考えることを大切にしている。焦らせていない、教師も焦っていない。教師が焦らずゆったりと構えていると幼児も安心して考えられる (b) 焦りから教師主導の話し合いをするのではなく、幼児のそれぞれの思いを言葉にする時間をつくることで主体性を大切に時間になったのだと感じた (f) 幼児に考えさせる時間をつくっている (g)

¹⁰ 幼児がつくる発表会であることが言える (c)

コメントの追加 [h3]: 幼児の思いを優先している、この時だからこそ言いたいことが言えたという、必要感のある話し合いの場を設けたことに対して、多くの共感を得た。幼児の「今、話したい」という思いを察し、受け止めたことが主体的な話し合いを支えることにつながった。一輪車グループが相談する様子や、その後の一輪車乗りの様子を捉え、思うようにしていないことを教師は感じていた。だからこそ、N児の「やっぱりみんなでやりたい」という思いにタイミングよく応えることができたと言える。

コメントの追加 [h4]: 教師が急かせていない、ゆったり構えている、幼児に考える時間を与えているといった指摘があった。教師が「～しなければ」と焦ると、教師主導の話し合いになってしまう。それでは、幼児自身の力で解決していく学びの機会とならない。本園の援助の特徴として「待つ姿勢」があるが、ここでも、教師は幼児が自分たちの力で問題を発見したり、解決したりすることを待っている。その心持ちが浸透しているからこそ、共感が集まったと言える。

4歳クラス児のお楽しみ発表会が終わり、3歳クラス5歳クラス児が遊戯室で遊び出す。MNO PQR児は遊戯室に行き、一輪車に乗り始める。
 Q児：「みんな来て。さっきのやってみよう」
 6人が補助用の横棒につかまって、横一列に並ぶ。
 O児：「行くよ、せえの」
 左右の端にいる幼児が手をつなごうとするが、途中でバランスが崩れて一輪車が倒れる。
 M児：「真ん中は、難しい…」
 P児：「私、真ん中でいいよ」
 M児：「ありがとう」
 N児：「もう1回やろう。せえの」
 左右の端にいた幼児の手がつながり、一瞬、6人が大きな輪になる。
 教師：「みんなすごい、一瞬つながってたよ。よかったねMちゃん」
 M児：「うん」
 O児：「これもお楽しみ発表会でやろうよ」
 「いいよ」「分かった」と他の幼児たちが賛同する。

遊びの時間、幼児同士で新しい乗り方を試しては「一輪車でバトンのリレーやろう」「いいよ」などのやりとりをする姿を見てきた。主体的に取り組む様子を感じつつも、6人で集まって相談することはなく、内心焦りを感じていた。しかし、あくまでも幼児自身の主体的な話し合いであってほしい¹¹と願っていた。担任副担任とで情報交換する中で、遊びの時間は一輪車に乗ったり技に挑戦したりすることに熱中しているため、6人で集まって話し合うきっかけがないのかもしれないと話した。そこで、幼児が保育室にいるタイミングで、発表の内容には触れずに、BGMの確認という形で6人が集まる機会¹²をもてるようにしてみることにした。

BGMの確認の後で、発表の内容について幼児の自発的な発言から話し合いが始まった。教師は、幼児同士で思いを伝える場となるように、幼児の輪の外に出て話し合いを見守った。O児が発言をしていなかったN児とP児の意見も求める姿¹³があり嬉しく思った。2学期に収穫物を届ける話し合いをしたときに、幼児同士で意見を言っていない仲間のことも気遣う姿があった。そのような姿が別の場面でも自然と見られたことに、仲間を大切にしよう、みんなで協力していこうという気持ちを感じた。また、Q児はM児の提案に難しさをつぶやきながらも、受け入れて前向きにやってみようと言言していた。実際に試して達成感を得て、お楽しみ発表会へ期待感が高まる様子を感じた。主体的に話し合う姿を協力して挑戦していた姿を振り返りタイムで話題にし、幼児自身もつ、人とかかわりながら課題を実現していく力を信じて待っていてよかったと語り合った。

考察

自発的な遊びの中では、同じ遊びをしている仲間同士であってもやりたいイメージや思いが異なることがある。調整したり折り合いを付けたりする過程でトラブルも起こる。しかし、これまでの「みんな」の時間での話し合いを経験してきた5歳クラスである。自発的な遊びの場面でも、話し合ったり相談したりして、みんなで気持ちよく遊ぶよさを感じてほしいと願っていた。今回、一輪車を発表したいと集まった仲間も、グループで分かれてやりたいという思いとみんなでやりたいという思いが交錯していた。まだ日数があったため、結論を急ぐことはしなかった。いよいよお楽しみ発表会が直前になり、お楽しみ発表会への思いも高まっていたのだろう。どんなことをしたいのか思いを伝え、みんなでやってみようという雰囲気になった。そして、話し合ったことをやってみたら楽しかった、嬉しかったといった思いは、仲間と協力するよさを感じることにつながったと考える。ばらばらに好きなことをしていても楽しい。でも、やりたい仲間同士で話し合ったり協力したりして取り組むともっと楽しい¹⁴という

11 遊び方が工夫されていく様子も把握しながら粘る。教師のその思いがあってこそ幼児が自分たちのやりたいようにできたのではないだろうか (a) 教師に頼らなくても、幼児同士で話ができるよう援助を控えめにしている (b)

12 教師は話し合う「きっかけ」をつくる援助を行うだけ。環境構成といってもよいくらいである (c) 間接的な援助をきっかけに幼児主体での話し合いになっている (d) 発表会2日前となったが発表内容について話し合わない幼児に自然と話すきっかけと場づくりができていたと感じた。そうすることで幼児の自発的な話し合いができたのだと感じた (f) 幼児の自発的な話し合いになるような時間や場の設定を工夫している (g)

13 自分のことだけでなく周りのことも考えられる姿 (b) 幼児同士の話し合いになるようにしている (g)

14 幼児の経験から感じるることができる良さである (c)

コメントの追加 [h5]: 自発的な話し合いが始まる「きっかけ」となる場と時間を設けた点について共感を得た。振り返りタイムで、お楽しみ発表会の内容について話し合いをしていない状況を話題にし、焦りを口にしたことも一回や二回ではない。しかし、様々な経験を積み重ねてきているⅫ期であり、春からの一人一人の幼児の育ちを知っているからこそ、幼児の力を信じて待っていようと話してきた。そして焦りを感じながらも待っていられたのは、「待つ心持ち」を担任副担任で共有し、しばしば確認していたからだと考えられる。お楽しみ発表会が間近になり、6人で集まるきっかけは設けた。しかし、発表内容については、幼児の言葉から出るまでは待っていようと決めていた。その後、幼児同士で話し合い、協力しながら取り組む姿を捉え、確かな育ちを感じた。この場面において待つことは、幼児の育ちを支えるための適切な援助であったと判断した。

経験をした幼児。お楽しみ発表会が終わってからも、「大技やってみよう」「コツが分かったよ。みんな聞いて」など、その場で話し合いながら、一輪車遊びを継続していた。¹⁵

幼児同士で励まし合う姿、コミュニケーションをとって遊びを進める姿、次から次へと新しい工夫を取り入れて挑戦する姿などから、よりよくかかわる力やがんばる力の成長を捉えた。その姿や育ち、変容を振り返りタイムで語り合ってきた。このような幼児の育ちを理解した上で、幼児の姿から感じられた自ら伸びようとする気持ちを大事にした。それが、幼児自身が実体験として仲間とかかわるよさを感じ、自らよりよくかかわろうとする気持ち¹⁶を支えることにつながったと考える。

このような幼児の自発的な話し合いは、突然できるようになったわけではない。積み重ねてこうした姿があるのだろう。その育ちの姿から、このような対応を考えて援助してきた。やはり幼児には自分たちで課題を解決しようとする力があり、遊びやかかわりを豊かにしていくことができる。

¹⁵ 発表という一つの目標が終わっても継続して「やりたい」という思いになっている（g）

¹⁶ 実体験をもとに幼児の育ちを支えようとする保育である（c）